「ガイヤルド」

内藤三千郎

あらすじ

ソフィー・ヤマガタは都内のインターナショナルスクールに通う高校生である。同じ学校のジェシー・ターナーとは互いを親友と呼ぶ間柄だったが、あるパーティでの事件がきっかけで仲違いをしており、それをソフィーは心苦しく思っていた。

ある日、ソフィーは母の咲恵からジェシーが行方不明になっていることを知らされる。以前からジェシーの生活は乱れており、相変わらずのことだろうとソフィーは思ったが、ジェシーの生活が乱れ始めた発端が、自分との不仲であることを実感していたソフィーは、ある種の後ろめたさからジェシーの捜索を始める。ジェシーの母、絵里子・ターナーが警察に届けたことは知っていたが、警察は単なる行方不明者として扱っており、捜索にも本腰を入れていないだろうと思ったからである。

同じくソフィーの親友であるトレイシーや洋次の協力を得て、捜索が続くが、ジェシーの家庭環境は複雑であり、愛人のいる絵里子からも、離婚を前提にロンドンに帰国してしまったマークからも有用な情報を得ることができない。ひとつ手掛かりがあるとすれば、以前、ジェシーが渋谷区道玄坂のラブホテル街を中年男と歩いていたという目撃者情報だった。もしかするとジェシーは「パパ活」をしていたのかもしれない。

そんな矢先、ジェシーを六本木のナイトクラブで雇用していたという川口という人物が現れる。川口は赤沢というクラブの顧客からジェシーを紹介されたとソフィーに伝えるが、その赤沢以外にジェシーにはパトロンがいたという事実も明かされる。

パトロンとは誰なのか？　ジェシーはそのパトロンと「パパ活」を通じて知り合ったのではないか。自らの捜索が暗礁に乗り上げる中、ソフィーはジェシーの捜索を絵里子に雇われた西野屋という私立探偵に任せる決意を固め、情報を提供する。そこに飛び込んできたのが赤沢という人物が毒殺されたというニュースであった。殺人事件ともなれば、警視庁も色めき出す。しかし、ジェシーの行方は依然としてわからない。

数週間が過ぎたある日、ソフィーは西野屋からジェシーの居所がわかったという連絡を受ける。しかし、急ぎ西野屋の事務所に向かったソフィーが見たのは撲殺された西野屋の遺体であった。

事の重大さに危機感を募らせるソフィーと父のトム。ある夜、ソフィーは公衆電話からの着信を受ける。電話はジェシーからに違いない。父のトムの説得し、公衆電話のある現場に到着するソフィー。ジェシーと殺人犯との接点はどこなのか。西野屋は何を嗅ぎつけて殺されたのだろうか。

ソフィーに閃いた犯人像は、西野屋の調査内容を詳しく知り、尚且つジェシーに近付くことのできる人物である、それは、ジェシーの母、絵里子・ターナーの愛人、鳥飼俊であった。ソフィーの推理に基づき、鳥飼俊が逮捕される。そして監禁されていたジェシーは、無事に救出されるのであった。

（主な登場人物）

ソフィー・ヤマガタ（１７）都内のインターナショナルスクールに通う女子高生。
ジェシー・ターナー（１７）かつてのソフィーの学友であり親友。行方不明になる。
トレイシー・ガードナー（１７）ソフィーの学友であり、親友である。
洋次（１６）ソフィーの学友で親友。
トム・ヤマガタ（５２）ソフィーの父親
咲恵・ヤマガタ（４６）ソフィーの母親
絵里子・ターナー（４４）ジェシーの母親
マーク・ターナー（４７）ジェシーの父親
川口（６０）クラブ、エル・マーメイドの経営者オーナー
西野屋（５７）絵里子に雇われた私立探偵
諏訪（４５）新宿警察捜査一課の刑事
ニコル（１７）ソフィーのクラスメート
ポーリン（１７）ソフィーのクラスメート
ライラ（１６）ソフィーのクラスメート
ミンディ（１７）ソフィーのクラスメート
ミッシー（１７）ソフィーのクラスメート
リアーナ（１６）ロンドン在住のソフィーの友人
鳥飼俊（３８）絵里子・ターナーの愛人

1

都内・ソフィーの学校・某インターナショナルスクール校門近くの歩道（朝）

タイトルバック・ＢＧＭと共に

道を急ぐ通学者、通勤者の群れの中に、ひときわ目立つグループがいる。

某インターナショナルスクールに通う生徒たちである。皆、学校の制服を纏い、年齢層は、中学生から高校生といった出立ち。

その中に、足早に通学路を急ぐひとりの女子高生。長い黒髪をポニーテールに束ね、ショルダーバッグを背中に担いでいる。ソフィー・ヤマガタである。端正な顔立ちに、意志の強さが窺える。

ソフィー、校門の前で同級生のニコルに遭遇し、笑顔でハイファイブを交わすと校内に吸い込まれて行く。

2

ソフィーの学校・教室（朝）

タイトルバック・ＢＧＭと共に

ソフィー、ニコルと共に教室に入って来る。

既に教室にいた生徒の数名と目で挨拶をすると着席する。

後に続いて教室に入ってくる生徒たち。

ソフィー、自分のショルダーバッグからノートＰＣを取り出し、机の上にセットする。

何人かの生徒が、ソフィーに歩み寄り、笑顔で挨拶を交わす。

クレジット及びＢＧＭ終わり。

3

ソフィーの自宅・ダイニングルーム（昼）

ソフィーの母、咲恵がテーブルの上のノートＰＣに向かって座っている。

咲恵のＰＣのスクリーン上にはラインメッセージが並んでいるが、その最後列に絵里子・

ターナーからのメッセージが来ている。
（うちの子が帰って来ないんですけど、お邪魔してないですか？）

咲恵、物憂げにＰＣから顔を上げる。

4（フラッシュバック）

軽井沢・別荘・テラス（夕方）

ティーンエイジャーがテラスに集まり、ＢＢＱを楽しんでいる。日本人顔もいるが、ほとんどがハーフ顔か、外国人顔である。
中にソフィーがいて、ソフィーの親友でハーフのジェシーがいる。
ソフィー「（ジェシーに耳打ちするように）誰にも言わないで。私、アンディが好きなんだ」
ソフィーが目配せした方向に、ブロンドの若い男子が立って、友達と談笑している。
アンディである。
ジェシー、意味深な笑みを浮かべ、ソフィーに頷くと、アンディの方を見る。

5（フラッシュバック）

軽井沢・別荘・ホール（夕方）

多くのティーンエイジャーが、ドリンクを片手にたむろし、歓談している。中にソフィーの姿もある。外のテラスにも、多くの人影。
離れた場所で、ジェシーがアンディと微笑みながら対話している。
ジェシー「ソフィーがあなたのこと好きなんだって」
アンディ、少し驚いたようにソフィーの方角を見るが、ソフィーはそれに気がつかない。
ジェシー「なんとかしてあげたら？」
アンディ、薄ら笑いを浮かべて頷く。
ジェシー「ことづけてあげようか？」
アンディ「いいよ。それよりちょっと相談がある

んだ」
ジェシー「私に？」
アンディ「うん。ここじゃ話聞かれるから、二階に部屋があるから、そこ行こう」
アンディが階段の上を指差し、ジェシーが頷くと、二人は連れ立って階上に消える。
他の友人と、歓談を続けるソフィー。

6（フラッシュバック）
軽井沢・別荘・キッチン（夕方）
キッチンに数名のティーンエイジャーが集まり、談笑している。ソフィーがドリンクを片手に入って来る。
ソフィー「（探すような仕草で）ジェシー見なかった？」
皆、首を横に振る。

7（フラッシュバック）
軽井沢・別荘・リビングルーム（夕方）
ニコル、トレイシー、ライラ、ミンディ、ミッシー、洋次、グスタボ、ポーリーンといったソフィーの仲良しグループの面々が歓談している。
ソフィーが歓談の輪に入って来る。
ソフィー「（誰にともなく）ジェシー知らない？」
洋次「二階に行ったんじゃないかな」
ソフィー、目で礼を言い、階段を上がって行く。

8（フラッシュバック）
軽井沢・別荘・二階の部屋（夕方）
ベッドのある寝室。
ジェシーとアンディが抱き合いながらキスを交わしている。
いきなりドアが開き、ソフィーが乱入する。
二人を見て、立ちすくむソフィー。

ソフィーを見て、バツが悪そうに苦笑するジェシーとアンディ。
部屋から走り出るソフィー。

9（フラッシュバック）
軽井沢・別荘・二階の廊下（夕方）
ベッドルームから走り出たソフィーが、泣きながら廊下を駆け、階段を降りて行く。

10（フラッシュバック）
軽井沢・別荘・リビングルーム（夕方）
泣き顔で階段を駆け降りて来るソフィー。
何事かと、ソフィーに目を向ける友人たち。

11（シーン2に同じ）
授業の合間に、ソフィーが友達と談笑している。
ふと、ソフィーが振り向いた場所に、誰も座っていないデスクがポツンとある。
少し感傷的な表情を浮かべるソフィー。

12　ソフィーの自宅・リビングルーム（夜）
咲恵が長椅子でＴＶを観ているところに、ソフィーが帰宅する。
ソフィー「（疲れたように）ただいま」
咲恵「（笑顔で）おかえり」
ソフィー「勉強あるから、上行くね」
咲恵「（去ろうとするソフィーを呼び止めて）ソフィー、ジェシーのこと聞いた？」
ソフィー、怪訝な顔で振り向く。
咲恵「お家に帰って来ないんだって」
ソフィー「（眉を上げて、冷笑的に）それって、いつもじゃない？」
咲恵「絵里子さんが心配して、メッセージ送ってきたのよ」
ソフィー「なんだって？」

咲恵「うちにお邪魔してないかって」
ソフィー、呆れたように肩をすぼめると、二階へ上がって行ってしまう。

13　ソフィーの学校・教室（昼）

座っているソフィーを取り囲むようにして、女子生徒ばかりが数名集まって不安げに懇談している。
ミンディ「前は朝帰りすることがあっても、全然帰って来ないってことはなかったんだって」
ソフィー「（心配そうに）警察に届けたのかな」
ミンディ「ママが届けたほうがいいってアドバイスしてた」
ライラ「グスタボが渋谷のセンター街で見かけたって言ってたよ」
ソフィー「それっていつのこと？」
ライラ「一週間くらい前だって」
ソフィー、眉を顰める。
ポーリーン「ジェシーが働いてたバー、知ってるよ」
皆の好奇の視線が、ポーリーンに向けられる。
ポーリーン「渋谷のセブン・ステップスっていうバー。お父さんの知り合いが経営してるバーだって言ってた」
ソフィー「行ったことあるの？」
ポーリーン「私はないけど、前にジェシーから聞いたの」

14　ソフィーの学校・キャンティーン（昼）

丸テーブルを囲んで数名の男子生徒が食事をしながら談笑しているところに、ソフィーとトレイシーがつかつかと歩み寄る。
何事かと見上げる男子生徒たちの中に、洋次とグスタボの顔。
ソフィー「（グスタボに）ジェシーのこと、一週間くらい前にセンター街で見たんだって？」

グスタボ「（戸惑いがちに）ああ、見たよ。道玄坂のほうに歩いてた」
ソフィー「誰かと一緒にいた？」
グスタボ「なんでそんなこと知りたいの？」
ソフィー「ジェシーが行方不明になってるの知ってるでしょ？」
グスタボ「行方不明って、一晩帰って来なかっただけだよね？　そのうちに帰ってくると思うけど」
洋次「（ソフィーに微笑みかけながら）グスタボ、答えてやれよ」
グスタボ「僕の知らない男性だったよ。日本人だと思うけど、中年の男性だった」
ソフィー「何時くらいに？」
グスタボ「夕方だよ、もう暗かった」
ソフィーとトレイシーが頷き合い、周囲にぎごちない沈黙が流れる。
ソフィー「（洋次に向かって）セブン・ステップスというバー知ってる？　渋谷にあるらしいんだけど」
洋次「渋谷のどの辺？」
ソフィー「それは知らないけど」
洋次、しばらく考えて首を横に振る。
洋次「そのバーがどうかしたの？」
ソフィー「ジェシーがそこで働いてたらしいの」
男子生徒たちが顔を見合わせ眉を上げる。

15　ソフィーの自宅・ダイニングルーム（夜）

食卓には、ソフィーの父であるトムと母の咲恵、そしてソフィーが座り食事をしている。
トム「失踪事件か誘拐事件か、その両方の線を考慮して警察は捜査するんじゃないかな」
咲恵「（ソフィーに）お父さんとは一緒に住んでたの？」
ソフィー、首を傾げる。

16（フラッシュバック）
ジェシーの自宅近くの公園（昼）

ジェシーとソフィーがベンチに座り、真剣な表情で何か話している。
ジェシー「パパと一緒にイギリスに行くことになるかもしれないの」
ソフィー「リジーも？」
ジェシー「(暗い顔で頷きながら)ママには、私たちより好きな人がいるから」

17（フラッシュバック）

ジェシーの自宅・リビングルーム（昼）

ジェシーがテーブルの上に放置されている母、絵里子の携帯を見つける。
何気なく操作をしているうちに、ジェシーの表情が驚愕のそれに変わる。
絵里子の携帯のスクリーンには、ジェシーの知らない日本人男性（鳥飼俊）が、絵里子とベッドで全裸で抱き合っている画像が写っている。

18（シーン15に同じ）

食事を続けるソフィー、トム、咲恵。
トム「日本の法律では、どちらかの親が子供を連れて失踪しても、誘拐罪には問われないんだよ」
咲恵「そんな大それたこと、マークがするかしら」
トム「俺が父親だったら、するかもね」
咲恵「でも、絵里子さんはリジーも帰って来ないとは言ってなかったし」
ソフィー「それにそうだとしたら、ジェシーの携帯が繋がらないって変じゃない？　メッセージ送っても返事も来ないんだよ」
トム「(咲恵に) 警察には通報してるんだろう？」
咲恵、不安顔で頷く。
トム「(ソフィーに) だったら、お前は自分の勉強に専念すればいい」
咲恵「でも誘拐事件なら、警察も捜査に本気になるらしいけど、身代金の請求とか、道を歩いていて

急に行方不明になったとか、特別な状況じゃないと、誘拐事件としての扱いにはならないんだって」
ソフィー「私、警察に行って、誘拐事件として捜査してもらうように言う」
トム「お前がいくら言っても、警察はそんなこと聞いてくれないよ」
ソフィー、不満げに顔を顰める。

19　ソフィーの学校・教室（昼）

ソフィーが洋次の座っている前に立って、洋次と会話している。
ソフィー「今日の放課後、付き合ってくれる？　渋谷のセブン・ステップスっていうバーに行きたいの」
洋次、怪訝そうにソフィーを見る。
ソフィー「ジェシーが働いてたバーだよ」
洋次「（納得したように頷いて）バーなんて、下手したら九時とか十時にならないと開かないよ」
ソフィー「大丈夫、開店五時半ってホームページに書いてある」
洋次「僕はいいけど、君は大丈夫なの？　ご両親は？」
ソフィー「大丈夫。友達と勉強するって言っておくから」
洋次、しばらく呆れたようにソフィーを見てから、ニヤリと笑う。
洋次「どうしてそんなにジェシーのことに熱心なの？」
ソフィー「（意外そうに）心配じゃないの？」
洋次「それは心配だけど、ソフィーはジェシーと仲が悪いじゃん」
ソフィー「（歯切れ悪く）別にそんなことないよ」
洋次「あの事件のこと、もう許したってこと？」
ソフィーの表情が急に強張る。

20（シーン8に同じ）

ベッドのある寝室。
ジェシーとアンディが抱き合いながらキスを交わしている。
いきなりドアが開き、ソフィーが乱入する。
二人を見て、立ちすくむソフィー。
ソフィーを見て、バツが悪そうに苦笑するジェシーとアンディ。
部屋から走り出るソフィー。

２１（シーン９に同じ）

ベッドルームから走り出たソフィーが、泣きながら廊下を駆け、階段を降りて行く。

２２（シーン１９に同じ）

ソフィー「（辛そうに）あれは、アンディが悪かったと思ってるから」
洋次、曖昧に頷く。

２３　渋谷区宇田川町・バー・セブン・ステップス・中（夕方）

間口は狭いが中は壁にいくつかのＴＶスクリーンが設置され、テーブル席もいくつかある、かなり広いバーである。
壁の柱時計が午後六時を回った頃で時間が早いせいか、客の姿はまばらである。
バーカウンターの後ろに立つ黒人のバーテンダー、ジョージが、ソフィーと洋次が入って来るのを見て、ギロリと目を剥く。
ソフィー「（ジョージに歩み寄り、ぶっきらぼうに）ジェシー・ターナー、ここで働いてたでしょ？」
ジョージ、ソフィーの流暢な英語に一瞬たじろぐが、すぐに平静を装う。
ジョージ「（訝しげに）ああ、働いてたよ」
ソフィー「最近、来てないの？」
ジョージ「（ソフィーと洋次を交互に見て）君たち、ジェシーの何なんだ？」

洋次「（遠慮がちに）友達です」
ソフィー「（無遠慮に）最後にジェシーを見たのはいつ？」
　ジョージ、不審そうにソフィーを睨みつける。
ソフィー「ジェシーが行方不明になってること知ってるでしょ？」
ジョージ「（驚いた様子で）いや、知らない」
　ソフィー、洋次と顔見合わせる。
ジョージ「スティーブに聞いたらいい。ジェシーのパパの友達だから」
ソフィー「ここにいるの？」
ジョージ「いや、普段は店には出て来ないけど、今夜は八時ごろに来ることになってる」
（ＷＩＰＥ ＯＵＴ）

２４（ＷＩＰＥ ＩＮ）
渋谷区宇田川町・バー・セブン・ステップス・中（夜）
壁の柱時計は、八時十分を指している。
客の数は先刻より遥かに多く、一見して外国人がほとんどである。
混雑した店内にソフィーと洋次がテーブルを挟んで対座している。
テーブルの上には、オレンジジュースとコカコーラ。
しばらくすると白人で長身痩躯の中年男が入口に現れバーカウンターに歩いて行く。バーのオーナー、スティーブである。
ジョージが頭を下げ、笑顔で挨拶してから何かスティーブに耳打ちすると、スティーブは表情を変え、ソフィーと洋次が座したテーブルの方へとゆっくり歩いて来る。
スティーブ「（穏やかに）ジェシーの友達なんだって？」
　ソフィーと洋次、頷く。
スティーブ「（表情を曇らせて）大変なことになっ

てるみたいだね」
ソフィー「はい、行方不明なんです。それで何か
お心当たりがあったらと思って」
スティーブ「（しばらく考えてから）特にないけど、
警察には行った？」
ソフィー「でも、警察は行方不明者として捜査する
でしょう？」
スティーブ「（不思議そうに）それが、何か問題が
あるの？」
ソフィー「私は、誘拐されたんじゃないかって思っ
てるので」
スティーブの表情が一変して硬くなる。
スティーブ「なぜ？」
ソフィー「自分から家出とかしたなら、友達と全然
連絡取ってないっておかしいし、ジェシーのスマ
ホも繋がらないし、あと、友達が目撃してるんで
す。ジェシーが、日本人らしいおじさんとこの辺
を歩いてるの」
スティーブ「どういうこと？」
ソフィー「パパ活って知ってますか？」
スティーブ「いいや」
ソフィー「日本では、少女売春のことです」
スティーブ、目を丸くして洋次を見る。無反
応な洋次。
スティーブ「（戸惑ったように）僕が知る限り、ジェ
シーはそんなことをする子じゃなかったよ。僕は
ジェシーのお父さんに頼まれて、ここで彼女を使
ってたんだけどね。だいたい見ればわかると思う
けど、ここに来る客の９０％は外国人だからね。
そんないかがわしい日本人と知り合う機会なんて、
あまりないと思うよ」
ソフィーと洋次、周囲を見回して眉を上げ、
首をすくめる。

２５　ソフィーの学校・校庭（昼）

校庭で、走り回り、遊んでいる生徒たち。

26　ソフィーの学校・校舎裏（昼）

ソフィーがジェシーの妹、リジーを壁際に立たせて対面している。

ソフィー「その後、どうしてるの？」

リジー「（緊張の面持ちで）どうって？」

ソフィー「みんな心配してるでしょう？」

リジー、泣きそうな顔になって頷く。

ソフィー「警察に行ったんだよね？」

リジー「はい」

ソフィー「なにか進展あったの？」

リジー、頭を振る。

ソフィー「ママとパパ、なにか言ってる？」

リジー「パパは、もう一緒にいないから」

リジー、泣き出す。

ソフィー「え？」

リジー「（泣きながら）パパはイギリスに帰ったの」

ソフィー「（驚きを隠せず）どうして？」

リジー「喧嘩して、パパは出て行ったの」

ソフィー「いつ？」

リジー「一週間くらい前」

ソフィー「どういうこと？　お姉ちゃんと一緒にイギリスに帰ったってこと？」

リジー「（半泣き状態で）よくわかりません。私が学校から帰って来た時は、パパもお姉ちゃんもいなかったから」

ソフィー「パパがいなくなってから、話した？」

リジー「フェースタイムで一度話しました」

ソフィー「パパ、お姉ちゃんがいなくなってること知ってるの？」

リジー「ママから聞いたって言ってました」

ソフィー「それで？」

リジー、涙を拭いて首を傾げる。

ソフィー「パパ、なんて言ってたの？」

リジー「帰ってくることをお祈りしてるって」

ソフィー、呆気に取られたように、黙ってリ

ジーを見つめる。

27　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ソフィーがベッドで半身を起こし、洋次と携帯で話している。

ソフィー「私は絶対、変だと思う」

28　洋次の自宅・洋次の部屋（夜）

洋次がベッドで半身を起こし、ソフィーに携帯で返答している。

洋次「（小さく笑いながら）ソフィー、がんばるな」

29（シーン27に同じ）

ソフィー「だって、納得できないでしょう？」

30（SPLIT　SCREEN）

ソフィーの部屋と洋次の部屋

洋次「そうかもしれないけど、警察に任せるしかないじゃない？」

ソフィー「どうしてテレビとかでニュースにならないのかな」

洋次「（微笑んで）日本で年間に何人が行方不明になってるか知ってる？」

ソフィー「知らないけど」

洋次「約、八万人だって」

ソフィー「そんなに？」

洋次「その中で十代が、約一万三千人。二十代の一万五千人に次いで多いんだよ。それをひとりひとり報道するわけにいかないじゃん」

ソフィー「よく知ってるんだね」

洋次「（照れ笑いして）ちょっと調べたんだ。僕もジェシーのことが気になってるからね」

ソフィー「それでどう思うのよ？」

洋次「なんのこと？」

ソフィー「ジェシーのパパのリアクション」

洋次「（笑って）どうなのかな。うちも僕が行方不明

になったら、そんな感じかも」
ソフィー「私は、マークさんはジェシーの居場所を知ってると思う」
洋次「なんで隠すのさ？」
ソフィー「それは、わからないけど」
洋次「直接、聞いてみなよ」
ソフィー「言うわけないでしょ、隠してるんだとしたら」
洋次「ロンドンに行くんだよ」
ソフィー「え？」
洋次「どこに住んでるかリジーなら知ってるんじゃない？　その住所にいきなり行くんだよ」
ソフィー「何言ってるの？　冗談やめてよ」
洋次「いや、マジだよ。そんなに気になるんだったら」

31（シーン27、29に同じ）

ソフィー、信じられないといった表情で携帯を切る。

32　東京・路上（朝）

制服に身を包んだソフィーとトレイシーが連れ立って歩いている。
トレイシー「（突然立ち止まって）え～、本気？」
ソフィー「（同じく立ち止まって）うん、本気」
トレイシー「私はいいけど、両親が何て言うかわからない。お爺ちゃんお婆ちゃんの都合もあるし」
ソフィー「それはわかってるんだけど、聞いてみてくれる？」
トレイシー、苦笑しながら頷く。

33　ソフィーの自宅・ダイニングルーム（夜）

ソフィーと咲恵がテーブルを囲んで夕食をとっている。
ソフィー「（上目遣いで）トレイシーにイギリスに招待されたんだけど」

咲恵「（驚いて）え、いつ？」
ソフィー「今度の休み」
咲恵「あなたそれ、あと一週間じゃないの？」
　ソフィー、笑って頷く。
咲恵「まるまる五日間行ってるつもり？」
ソフィー「そう、あっちの大学も見ておきたいし」
咲恵「私ひとりじゃ、ＯＫ出せないわ。パパに聞いてごらんなさい」
ソフィー「パパがいいって言ったらいいのね？」
咲恵「トレイシーと二人きり？」
ソフィー「そう」
　咲恵、考えるように首を傾げる。
　それを見て、ほくそ笑むソフィー。

３４　英国・ロンドン（昼）

ビッグベンがあり、国会議事堂がある。二階建バスが走行し、テムズ川にかかるウェストミンスター・ブリッジ上の往来が激しい典型的なロンドンの一シーン。

３５　ロンドン・ヒースロー空港・表（昼）

空港ビルからスーツケースを引き摺りながら現れるソフィーとトレイシー。
トレイシーは疲れたような様子だが、ソフィーの瞳は物珍しそうに輝いている。
間髪を入れずに、制服・制帽を身に纏った運転手が、スーツケースを受け取りに二人に駆け寄る。
笑顔で、運転手と挨拶を交わすソフィーとトレイシー。
運転手が停車しているベントレーの後部座席のドアを開けると、乗り込むソフィーとトレイシー。

３６　ロンドン郊外・高速道路（昼）

ソフィーとトレイシーを後部座席に乗せ、疾

走するベントレー。
窓から外に目を向け、顔を輝かしているソフィー。

37　ロンドン・ハムステッドヒース（夕方）

緑の多い佇まいの中に、邸宅が並ぶエリア。
その中の一軒に、ソフィーとトレイシーを乗せたベントレーが滑り込む。

38　ベントレー・中

停車したベントレーの後部座席から外部に目をやるソフィーを、笑顔で覗き込む老夫婦。
トレイシー「（ソフィーに）私のお爺ちゃんとお婆ちゃんだよ」
ソフィー、トレイシーを見て頷く。

39　邸宅の玄関先（夕方）

車から出たトレイシーを、祖父、オースティンがハグし頬にキスする。祖母、ジェーンがそれに倣う。
続いて車から出たソフィーとは握手を交わすオースティン。
オースティン「（笑顔でソフィーに）オースティンと呼んで下さい」
すぐにジェーンがソフィーに握手を求める。
ジェーン「（笑顔で）ジェーンです」
老夫婦に肩を抱かれるようにして、トレイシーと共に邸宅内へ消えるソフィー。
運転手と召使いが、ソフィーとトレイシーの旅の荷物を運び込む。

40　邸宅・ダイニングルーム（夜）

天井から下がるシャンデリアが印象的な絢爛豪華なダイニングルーム。
大きなダイニングテーブルを囲んで、トレイシーの祖父母とトレイシー、ソフィーが座っ

て食事をしている。
テーブルの上に並ぶ、豪勢な料理。
テーブルマナーがわからず、トレイシーを見よう見真似で食事を続けるソフィー。
それを見て、微笑み合う老夫婦。

41　邸宅・ソフィーの部屋（夜）

夕食を摂っていた時と同じ服装で、ソフィーとトレイシーが部屋に入ってくる。
直ぐに疲れたようにベッドに仰向けに寝転ぶソフィー。
ソフィー「ああ、疲れた」
トレイシー、立ったままで、ソフィーを見て明るく笑う。
ソフィー「（トレイシーを見て）いつもあんな食事なの？」
トレイシー「（笑いながら）今夜は特別な歓迎ディナーだから。明日からは朝食以外は外で食べるから安心していいよ」
ソフィー「良かった。何食べたかわからないくらい緊張した」
トレイシー、また面白そうに笑う。
トレイシー「明日はジェシーのパパに会うんでしょう？」
ソフィー「（半身を起こして）マークさんね。家にいればだけど」
トレイシー「住所は間違いないんだよね？」
ソフィー「リジーが教えてくれた住所が正しければね」
トレイシー「（独り言のように）ランベス区か」
ソフィー「どんなところ？」
トレイシー「行ったことないから、わからないけど。テムズ川の向こう側よ」
ソフィー、曖昧に頷く。
トレイシー「安全対策は万全？」
ソフィー「さっき、リアーナに電話しといたから。

私たちとマークさんとの会話は、リアーナに筒抜けになる。何かあったら、彼女が警察に通報するって仕組み」

トレイシー「リアーナ、リッチモンドにいるんだよね？」

ソフィー「そう、明後日、私たちに会いに来るわ」

トレイシー、笑顔で親指を立て、ＯＫサインを出す。

４２　ロンドン市街（昼）

市街を抜け、一路、ランベス区へと急ぐベントレー。

４３　ベントレー・中（昼）

後部座席に座り、互いの手を握りながら緊張の面持ちのソフィーとトレイシー。

車窓の外を、ロンドンの街並が過ぎ去って行く。

４４　ロンドン・ランベス区・ケニントンロード（昼）

ソフィーとトレイシーを乗せたベントレーが車道の左側に寄って止まる。

４５（シーン４３に同じ）

後部座席のトレイシーとソフィーがスマホのナビと外の景色を見比べている。

トレイシー「（運転手に）ここでいいわ」

運転手「（訝しげに）ここ、ですか？」

トレイシー「そう、この近くに友達が住んでるから、ここから先は徒歩で行くから」

４６（シーン４４に同じ）

ベントレーから外に出るソフィーとトレイシー。スマホのナビを見ながら歩道を歩き出すと同時に、ベントレーが走り去る。

角にあるパブの横を抜け、心配そうに歩を進めるソフィーとトレイシー。

47　ロンドン・ランベス区・オークデンストリート（昼）

ソフィーとトレイシー、ずらりと並んだ三階建てタウンハウスの中の一軒の前で足を止める。

トレイシー「（不安げに）ここ？」

ソフィー、タウンハウスを見上げて黙って頷く。

トレイシー「行く？」

ソフィー「（スマホの向こうのリアーナに）今から突撃する」

ソフィー、リアーナからの返答に相槌を打ち、スマホをポケットにしまうと、トレイシーに目で合図し、手を取り合って一歩を踏み出す。

48　ロンドン・ランベス区・タウンハウス・表（昼）

タウンハウスのドアの外に立つソフィーとトレイシー。

意を決したように頷き合うと、二人手を携えてドアをノックする。

数十秒が経過するが、内部から音沙汰がなく、ソフィーが再びドアをノックする。

中で物音がして、ドアが開き、ジェシーの父親、マークが外を窺うように顔を見せる。

不審そうに、ソフィーとトレイシーを見比べるマーク。

マーク「（泳いでいた目の焦点をソフィーに合わせて）君は・・・」

ソフィー、口を結んで頷く。

マーク「（不確かに）ソフィー、だよね？」

ソフィー「はい」

マーク「（ソフィーとトレイシーの背後を見るよう

にして）ジェシーもいるの？」
ソフィーとトレイシー、困惑して顔を見合わせる。
マーク「いないみたいだね」
ソフィー「いません。私たち、ジェシーを探しに来たんです」
マーク「（驚愕の色を見せて）ジェシー、まだ帰ってきてないの？」
ソフィー、首を横に振る。
マーク「（ドア口から一歩下がって）とにかく、中に入って」
ソフィーとトレイシー、マークとともに建物の中へと姿を消す。

49　ロンドン・ランベス区・タウンハウス・マークの部屋（昼）

タウンハウスの二階の部屋。ベランダから裏庭が臨める。
ソフィー、トレイシー、マークの三人それぞれが椅子に座り、ティーカップから紅茶を啜りながら対面している。
マーク「（神妙な面持ちで）恥ずかしいことだけどね、妻とはあれ以来、連絡を取ってないんだ。だから、ジェシーの行方がまだわからないなんて、本当にショックだよ」
ソフィー「リジーとも話してないんですか」
マーク「そうだね。フェイスタイムで話したのが最後だ」
ソフィー、納得できない面持ちでトレイシーを見る。
マーク「（バツが悪そうに）君たちには、よくわからないことだと思うけど、離婚すると親権の問題が出てくるんだよ。つまり子供をどちらの親が引き取るかってことなんだけど、日本では共同親権が認められてなくて、単独親権になっちゃうんだ。僕が子供の親権をクレームするとしたら、裁判し

かなくてね。それで、これから離婚協議も含めて、妻と争うことになった。妻の弁護士のアドバイスで、ジェシーとリジーには僕と話させないようにしたらしい。だから、こっちに来てからはリジーと一度話したっきりで、妻からもなんの連絡もないし、ジェシーが今も行方不明だなんて全然知らなかったんだ」

ソフィーの表情が落胆のそれに変わる。

マーク「絵里子とジェシーの親子関係は特に険悪でね。あんまり口を利いてなかったと思う。だから、ジェシーも家に帰って来ないことが多くてね。僕も不在がちだったけど、ジェシーも友達の家とかに泊まることがよくあったんだ。だから、今回もそれだろうと思ってたんだよ」

トレイシー「その友達って、誰だが知ってますか？」

マーク「（沈痛な顔で）君たちだと思ってたんだ」

ソフィーとトレイシー、眉を上げて顔を見合わせる。しばし、重い沈黙が流れる。

50　ロンドン・ハムステッドヒース駅・改札口

（昼）

好天候の下、人通りの多い改札口。ソフィーとトレイシーが人待ち顔で立っているところに、卒然と姿を現すリアーナ。

リアーナ「（大きな笑顔で）ソフィー、トレイシー！」

ソフィーとトレイシー、振り向くと同時に歓声を上げ、飛び上がって抱き合う三人。

トレイシー「（明るく、リアーナに）元気そうじゃん」

リアーナ「（笑って）元気、元気」

ソフィー「（リアーナに）昨日はありがとう！」

リアーナ「（急に真面目顔になって）うん、大変なことになったね」

ソフィー「（苦々しく）結局、収穫ゼロ」

リアーナ、残念そうに頷く。

トレイシー「ね、お天気だから、公園の中歩かない？」

トレイシーが指差す先には、ハムステッドヒースの深い緑が広がっている。

51　ロンドン・ハムステッドヒース（昼）

緑の森と草原の間を縫うように伸びる小道を、ソフィー、トレイシー、リアーナの三人が歩いている。

トレイシー「私は絵里子さんが一番怪しいと思う。だって、マークさんによると、ジェシーは家に帰って来ないことも頻繁にあったんでしょう？　それなのに一晩帰って来ないだけで、どうして絵里子さんがみんなの親にメッセージ送るのよ？　変だと思う」

ソフィー「私もそれ思ったけど、私たちはマークさんの言い分しか聞いてないからね」

トレイシー「でも、絵里子さんが本当のことを言うとは、私には思えないんだよね」

ソフィー「とにかく会って、話を聞いてみようよ」

リアーナ「私も、それしかないと思う」

トレイシー「いいけど、もし絵里子さんがジェシーの居場所を知ってて隠してるんだとしたら、警戒されるだけだよ」

リアーナ「（ソフィーに）っていうか、イギリスに来る前に、絵里子さんと話すべきだったんじゃない？」

ソフィー「私も絵里子さんを疑ってたからすぐに会うのはどうかと思ったの。例の軽井沢事件覚えてるでしょ？」

リアーナ、眉を顰めて頷く。

ソフィー「あの時から、絵里子さん、私のこと良く思ってないんだよ。だから、彼女が私に協力的になってくれると思わなかったから」

リアーナ「でも、会うの？」

ソフィー「他にいいアイデアが浮かばないから」

トレイシー「（ソフィーに）だけど、今回みたいに、絵里子さんから何も情報を得られなかったら、その後どうするの？」
ソフィー「私は、パパ活の線でも調べてみたい」
リアーナ「（立ち止まって）パパ活？」
リアーナに合わせて、ソフィーとトレイシーも立ち止まる。
ソフィー「少女売春のこと。日本ではそう呼んでるの」
トレイシー「そんなの、どうやって調べるのさ？」
ソフィー「（ニヤリと笑って）罠をかけるのよ」
トレイシーとリアーナ「（同時に）罠？」

52　東京・ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ソフィーがベッドで半身を起こし、洋次と携帯で話している。
ソフィー「そういうことで、絵里子さんに会うことになったから、明日、トレイシーと一緒に近くでスタンバイしてて欲しいの」

53　洋次の自宅・洋次の部屋（夜）

洋次がベッドで半身を起こし、ソフィーに携帯で返答している。
洋次「それはわかったけど。スマホ、ＯＮにしとけばいいんだね？」

54（シーン52に同じ）

ソフィー「ＹＥＳ」
ソフィー、通話を終えてベッドに横になる。
天井を見つめ、不安気な面持ち。

55　東京・絵里子の自宅・表（昼）

住宅街の木造タウンハウス。その前に、覚悟を決めた表情のソフィーが立っている。
ふと背後を振り向くと、かなり距離を置いて洋次とトレイシーが立って見守っている。

ソフィー、歩を進め、タウンハウスのドアのブザーを押す。
しばらくしてドアが開き、絵里子・ターナーが顔を出す。
髪は乱れ、憔悴した表情の絵里子。弱々しく微笑むと、ソフィーを中に招き入れる。

56　絵里子の自宅・リビングルーム（昼）

窓にはブラインドが下され、部屋は暗く、散らかっている。
絵里子、ソフィーに椅子に座るように指示すると、自分は、グラスにウィスキーを注ぎ、向い側の椅子に腰を下ろす。
絵里子「（ぼんやりとした目で）それで？」
ソフィー「（ドギマギして）いえ、あの、私、ジェシーのこと心配してるので、何かわかったのかと思って」
絵里子「（不審そうに）そんなこと聞きに来たの？」
ソフィー、緊張の面持ちで姿勢を正す。
絵里子「そんなことなら、ラインで聞けたでしょう？　私は、あなたが何か知ってるのかと思って、期待してたんだけど」
ソフィー、何か言おうとして口籠る。
絵里子「（冷笑的に）咲恵さんに言われて来たの？探りを入れなさいって？」
ソフィー「いえ、違います。母は知らないです」
絵里子、射るような視線でしばらくソフィーを見つめていたが、急に笑い出す。
絵里子「正直に言っていいのよ。私のこと疑って来たんでしょう？」
絵里子を見つめ返すが、戸惑いを隠せないソフィー。
絵里子「（自嘲的に）ジェシーから私のこといろいろ聞いてるもんね。無理もないわ」
絵里子、グラスのウィスキーを飲み干すと、椅子をソフィーに近づける。

絵里子「（真顔で）いいわ、お互いに正直に話そう」

57　カフェ・中（昼）

ソフィー、トレイシー、洋次がテーブルを囲んで座談している。

トレイシー「（ソフィーに）それで諦めるの？」

ソフィー「だって、もうこれ以上できることってある？　絵里子さんは何も知らないようだし、警察にも届出済みだし、探偵雇って捜索お願いするって言ってるし、絵里子さんにもできることが限られてると思う」

トレイシー「不倫してた相手と再婚するつもりなのかな？」

ソフィー「離婚が成立したら、そうするんじゃない？」

トレイシー「（顔を顰めて）ジェシーやリジーが可哀想。私だったら耐えられない」

洋次「その話、今日初めて聞いたよ。そんなことがあったんだな」

ソフィー「ジェシーが私だけに話してくれたことだから」

トレイシー「（ソフィーに）パパ活の線で調べるっていうアイデアはなくなったの？」

洋次「（身を乗り出して）え、それってどういうこと？」

トレイシー「（笑って）ソフィーが囮になるって話」

ソフィー「（洋次に）ほら、グスタボがジェシーをセンター街で見たって言ってたでしょ？」

洋次「ああ、日本人のおじさんとね」

ソフィー「ジェシーがパパ活してた可能性があるって思ってるから。そこから何か手がかりが掴めないかなって」

洋次「（困惑した顔で）ソフィーがパパ活するってこと？」

ソフィー「ふりだけよ。囮になって、ジェシーを知ってる人を探すの」

洋次「無謀なこと考えるんだな。パパ活なんてしてる女子高生とか女子大生なんて何万人もいるよ。その相手してる男もね。そんなことしても、干し草の山から針一本を探し出すようなもんだよ」
トレイシー「でしょ、私もそう思ったんだ」
ソフィー「じゃ、諦めるしかないじゃない？」
しばらく、ぎごちない沈黙が流れる。
洋次「（おもむろに）僕は諦めたくないな」
同時に洋次を見るソフィーとトレイシー。
洋次「もしジェシーが本当に売春みたいなことしてたんだったら、どこかで男性と知り合ってるはずだっていうのが、ソフィーのアイデアのベースになってるんだよね？」
ソフィー、頷く。
洋次「その場所の第一候補、僕知ってるよ」
ソフィー「え？」
洋次「西麻布のラッシュっていうナイトクラブ。そこで何度がジェシーを見かけてる」

58（フラッシュバック）
西麻布・ラッシュ・中（夜）
客で混雑したナイトクラブ。ダンスフロアで踊る客。
テーブル席で歓談する客。
バーカウンターに立っている洋次が目を向ける彼方に、派手なドレスを着たジェシーが成人男性と談笑している。

59（シーン57に同じ）
ソフィー「いつ頃の話？」
洋次「去年のことだから、だいぶ前だけどね。あそこは未成年は入れないから、同伴者と来てるはず。僕はオーナーがパパの知り合いだから、顔パスだけどね」
トレイシー「話さなかったの？」
洋次「挨拶程度だよ。こっちも友達と一緒だったか

らね。あそこはプライベートな場所だから、事件でも起きない限り警察が踏み込むこともない。ナンパされに行っても、学校に知れることもないし、囮捜査とかするならいい場所だよ」

ソフィー、トレイシーと顔を見合わせる。

洋次「あとさ、今思ったんだけど。僕たち凄いネットワークを持ってるだろう？」

ソフィー「凄いって？」

洋次「ネットを通じて世界と繋がってるってことだよ。まず、それを利用する。つまり、ネットを通じてジェシーの画像を拡散して、探してもらうんだ」

ソフィー「インターの子たちに？」

洋次「いや、日本中の中高生や大学生や、スマホを持ってネットに登録してる全ての人さ」

トレイシー「だけど、行方不明者の写真とか、もうネットに出回ってるよ。誰も気にしてないじゃん」

洋次「僕はフォロワーが何十万人レベルの人知ってるからね」

トレイシー「洋次のお父さんのこと？」

洋次「いや、パパに頼むことはできないよ。パパは僕とはできるだけ関わり合いたくないって思ってるから」

トレイシー「じゃ、誰？」

洋次「有力ＹＯＵＴＵＢＥＲだよ。その人に頼めば、一気にジェシーに注目が集まる」

ソフィー「（身を乗り出して）ちょっと待ってよ。そんなことして、マスコミとかに取り上げられたらどうするの？」

洋次、意外そうにソフィーを見る。

ソフィー「取材とかに来られて、プライバシーを暴かれて、一番困るのはジェシーだし、絵里子さんだし、マークさんなんじゃない？」

洋次「それにそんなこと、背に腹は代えられないんじゃない？　今はジェシーの命を救おうとしてるんだから」

ソフィー「命とは限らないよ。居場所を探してるんだから。それに仮に命だったとして、それって誰かに監禁されてるってことでしょ？　日本中とか世界中の人とかがジェシーのことを知って探してるってわかったら、ヤバいと思って逆にジェシーのこと殺しちゃうかもしれないじゃない？」
トレイシー「私もソフィーに賛成だな。ジェシーが自主的に逃げてても、誰かに捕まってても、追い詰めちゃダメだと思う。下手したら絵里子さんや、リジーを死に追い込むことになるかもしれないし」
洋次、不満そうにソフィーとトレイシーを交互に見て黙ってしまう。
トレイシー「（静かに）私、ラッシュなら行ってもいいよ」
ソフィー、なにごとかとトレイシーに目を向ける。
トレイシー「（不敵に微笑んで）囮になってあげる」
ソフィー「どこまでやるつもり？」
トレイシー「ホテルとかは行かないけど、その手前くらいなら」
ソフィー、洋次と顔を見合わせる。
ソフィー「キスとか求められたらどうするの？」
トレイシー「（あっけらかんと）それくらいならしてもいいよ」
ソフィー「（心配気に）でも、身の安全は確保しないと」
洋次「（自信あり気に笑って）それなら大丈夫だよ。オーガストにヨシオさんからちゃんと言っておいてもらうから」
ソフィー「誰、そのひとたち？」
洋次「オーガストはラッシュのバウンサー。ヨシオさんは、チーフ・バーテンダーの人。二人とも僕の知り合い」
ソフィー「それなら、私もやってみる」
ソフィーとトレイシー、目を合わせて微笑む。

６０　西麻布・クラブ「ラッシュ」・表（夜）

外観は何の変哲もない都心部のマンション。
その地階へと降りる階段の入り口に「ＣＬＵＢ　ＲＵＳＨ」と書かれたサイン。

６１　西麻布・クラブ「ラッシュ」・中（夜）

二層のダンスフロアと、四つのバーカウンターからなる大規模なナイトクラブ。
外国人と日本人が入り混じった多くの客が、ダンスフロアを埋め尽くし、テーブル席で談笑している。
バーカウンターの後ろで気忙しく動き回るバーテンダーたち。
入り口近辺に、制服を着たバウンサーのオーガストが立ち、店内に目を光らせている。
そこに現れる洋次、トレイシー、ソフィー。
洋次はファッション・スーツを着込み、トレイシーとソフィーは煌びやかなカクテル・ドレスを身に纏っている。
オーガストに笑顔で会釈し、ソフィーとトレイシーをエスコートするようにしながら店内へと進む洋次。
周囲の男たちの目が、一気にソフィーとトレイシーに向けられる。
バーカウンターへと歩み寄り、バーテンダーのヨシオに挨拶する洋次。笑顔で丁重に迎えるヨシオ。
洋次、自分の背後にいるソフィーとトレイシーをヨシオに紹介するが、ＢＧＭと店内の騒音で、二人の間の会話は聞こえない。

６２　西麻布・クラブ「ラッシュ」・バーカウンター（夜）

カウンターのスツール席に腰掛けて、注文したドリンクを啜っているソフィー、トレイシー、洋次の三名。

ソフィー「（トレイシーに小声で、不安そうに）ここで待ってればいいの？」
トレイシー「（笑って）誰か声かけてくるまでね」
洋次、少し離れたテーブル席の知り合いに呼ばれ、カウンター席を離れてしまう。
ソフィー「誰か声かけてきたらどうするの？」
トレイシー「画像見せてジェシーのこと知ってるか、聞いてみたら？」
ソフィー、不安そうに頷く。
トレイシー「（そわそわして）私、他の席に行ってくる」
ソフィーが言葉を発する前に、席を離れてしまうトレイシー。
ひとりカウンター席に取り残され、困惑顔のソフィーの隣に、中年の日本人男性が来て座る。

男「（ソフィーに）こんばんは」
ソフィー「（ちょっと間を置いて）こんばんは」
男「（ソフィーを上から下までジロジロ見ながら）初めて見る顔かな？」
ソフィー、躊躇いがちに頷く。
男「そう、ひとりなの？」
ソフィー「いえ、友達と来てます」
男「（周囲を見回して）そうなんだ」
ソフィー「はい」
男「君、芸能界に興味ある？」
ソフィー「（戸惑いがちに）芸能界、ですか？」
男「そう、タレントとかモデルとかさ。もし興味があるなら、デビューさせてあげるよ」
ソフィー、男の質問を無視し、ポーチからスマホを取り出してジェシーの画像を男に見せる。
ソフィー「あの、この子、知りませんか？」
男、スマホの画面に一瞬目を落とし、それから少し警戒するような眼差しをソフィーの横顔に向ける。

男「君は何なの？」
男、答えないソフィーに憤慨したように黙って席を立ち、歩き去る。
唖然と、その後ろ姿を見送るソフィー。
ほぼ同時に、洋次が戻ってくる。
洋次「収穫あった？」
ソフィー「（笑って）全然ダメ」
洋次「（離れたテーブル席を指差して）あっちにおいでよ」
ソフィー、頷いて席を立つ。

63　西麻布・クラブ「ラッシュ」・テーブル席（夜）

テーブル席に着いている洋次の顔見知り数名が、ソフィーを笑顔で招き入れる。
ＢＧＭに掻き消されてはっきりと聞こえないが、会話が弾み笑い声が炸裂する。
ソフィー、着信音に気づき、スマホの画面を見る。
トレイシーのメッセージ（今からホテルに行くから追ってきて）
ソフィーの返信（え、今どこにいるの？）
返信がないことに焦り、ソフィーが立ち上がる。
何事かとソフィーを見上げる洋次に、スマホの画面を見せるソフィー。
洋次、血相を変えて立ち上がり、辺りを見回す。
トレイシーのメッセージ（今、入り口ドアの近くに立ってる）
ソフィーと洋次、クラブのドア口で、若い男性に肩を抱かれるようにして外に踏み出さんとしているトレイシーを見つけ、走り出す。
ドア口から外へと姿を消すトレイシーと若い男性。
ドア口に到着する洋次とソフィー。
洋次「（オーガストに、早口で）一緒に来て」

オーガスト、承知したと頷くと、ソフィー、洋次の後に続いてドア口から店外へと姿を消す。

64　西麻布・クラブ「ラッシュ」・表（夜）

ドア口から外へと飛び出してくるソフィー、洋次、オーガスト。

トレイシーの姿を探す、三人。

トレイシー、若い男と連れ立って六本木通りを右へと曲がり、ビルの陰に姿を消す。

追う、ソフィー、洋次、オーガスト。

65　六本木通り（夜）

深夜に近いが、交通量の多い六本木通り。

ソフィー、洋次、オーガスト、駆け足で六本木通り沿いの歩道に出る。

前方に三人に気づかずに、六本木通りの横断歩道を悠然と渡って歩いて行くトレイシーと若い男。

反対側の歩道に到着すると、手を上げタクシーを止める若い男。

男とトレイシーがタクシーに乗り込むのを確認して、横断歩道を走るソフィー、洋次、オーガスト。

トレイシーと男を乗せたタクシーが走り去る。

洋次、手を上げて後続のタクシーを止めると、助手席に乗り込み、ソフィーとオーガストが後部座席に走り込む。

66　タクシー・中（夜）

洋次が助手席に、ソフィーとオーガストが後部座席に座っている。

洋次「（前方を行くトレイシーと男が乗ったタクシーを指差して、早口で運転手に）あのタクシー、追ってください」

運転手が頷き、タクシーは発進する。

緊張の面持ちのソフィーとオーガスト。

67　六本木通り（夜）

先を走るトレイシーと男を乗せたタクシー。
それを追う、洋次、ソフィー、オーガストを乗せたタクシー。

68　タクシー・中（夜）

前方で信号待ちをしているトレイシーと男を乗せた前方のタクシーを、後方のタクシーの車内から凝視している洋次、ソフィー、オーガスト。
信号待ちを終え、走り出す前方のタクシー。
後に続く後方のタクシー。
少し進むと、前方のタクシーが左折のウィンカーを出し、左車線から狭い路地を左折する。

洋次「（運転手に）続いてください」

後続のタクシーが左折すると、そこは暗い住宅街。
前方のタクシーのテールランプが明るく見える。
少し進み、停車する前方のタクシー。

洋次「（運転手に）ヘッドライト消して止まって」

三十メートルほど先に停まっているタクシーの後部座席ドアが開き、男とトレイシーが出てくる。
その前方には、ホテルらしき建物。
洋次がドアを開けると同時に、オーガストが後部座席から飛び出す。
トレイシーと男の方角に向かって猛ダッシュする洋次とオーガスト。
振り向く間もなく、オーガストのタックルが男を吹き飛ばし、地面に叩きつける。
トレイシー、ソフィーの方に向かって走る。
バシバシと、人を殴る音が聞こえるが、ソフ

ィーの位置からは暗くて何が起きているのか良く見えない。
青褪めた顔で、後部座席にいるソフィーを覗き込むトレイシー。
トレイシーの笑顔が、歪んで見える。

69　六本木・某カフェ・表（早朝）

ソフィー、洋次、トレイシーが前夜の服装のままテーブルを囲んでいる。

70　六本木・某カフェ・中（早朝）

ソフィーとトレイシーは携帯をチェックし、洋次はボンヤリとコーヒーを啜っている。
三人とも疲れた様子。
洋次「（おもむろに）過去にも何度か、同じようなことをしてたんじゃないかな」
ソフィー「（顔を上げて）え、どういうこと？」
洋次「あそこでナンパしたり、金で女を買ったり。多分だけど、もっと酷いことも」
ソフィー「もっと酷いこと？」
洋次「睡眠薬をドリンクに入れて、レイプとかしたりさ。だから、警察に届けることもできなかったんだと思う。前科がいろいろあるんだよ、きっと」
ソフィー「クラブの常連なの？」
洋次「僕は見たことなかったけどね、何回かは来てるんだろうね。でも、ジェシーの行方を知らないのは本当らしい」

71（フラッシュバック）

西麻布・クラブ「ラッシュ」・ＶＩＰルーム

部屋には、洋次、ソフィー、トレイシー、オーガストに囲まれるようにして、例の若い男が座っている。
二十代後半から三十代前半くらいのその男はティッシュで鼻血を抑えながら、必死の形相。

若い男「家宅捜索でもなんでも応じるよ。そんなヤバいこと、俺がするわけないって」
トレイシー「じゃ、なんでジェシーのこと知ってるって言ったのさ？」
若い男「見たことあるって意味だよ。どこにいるかなんて知らないよ。頼むから警察はやめてほしい。俺にも仕事もあるし、家族もいるからね。示談で済むなら、できる限りのことはするよ」
男を訝しげに見るソフィー、トレイシー、洋次、オーガストの四人。

72（シーン70に同じ）
ソフィー「（トレイシーに）私たちが追い付かなかったら、どうするつもりでいたの？」
トレイシー「ホテルの前から走って逃げようと思ってた」

73（ソフィーの想像）
ホテル前の路上（夜）
夜の西麻布のホテル前から、ドレスの裾をはしょり、ヒールを脱ぎ捨てて全力で男から逃げるトレイシー。
（STOP MOTION）

74（シーン70、72に同じ）
ソフィー、トレイシー、洋次、顔を見合わせて笑う。

75 ソフィーの学校・教室（昼）
放課後の教室に、ソフィーの仲良しグループ女子ばかりの九人が集まっている。
メンバーは、ソフィー、トレイシー、ポーリーン、ニコル、ライラ、ミッシー、ミンディ、カレン、ミーガンである。
トレイシー「（心配顔のソフィーに）私たち、もうできる限りのことはしたんじゃない？」

ソフィー「（不満げに）私は、できる限りのことをしたとは思ってないけど。私は続けるつもり」
ニコル「（ソフィーに）洋次はなんて言ってるの？」
ソフィー「まだ聞いてない」
ポーリーン「（硬い表情で）私は家庭教師がほとんど毎晩入ってるし、どこまで協力できるか正直言ってわからない」
ミッシー「私も無理かな」
ミンディが同意して頷く。
カレン「これって、やっぱり親に相談したほうがいいんじゃない？」
ミーガン「ダメだよ。先生とか親は絶対、邪魔するよ」
カレン「だけど、このままじゃ危険だよね。警察は本当に何もしてくれないの？」
トレイシー「誘拐事件じゃないからね。あとは絵里子さんが雇うって言ってた私立探偵に期待するしかないと思うけど」
ライラ「私はできるだけ協力するよ」
教室の皆が一瞬ざわめく。
ライラ「危険なことはできないし、するべきじゃないとは思うけど」
ニコル「私にも何かできることがあったら言って」
ニコルの発言を受けて、皆が「私も」と言い始める。

76　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

鏡に向かって化粧を落とし、前髪を下ろして日本の女子高生風にメイクをし直しているソフィー。
傍らに置いてある携帯のスクリーンには、「パパ活」サイトの掲示板が表示されている。

77　トレイシーの自宅・トレイシーの部屋（夜）

カクテルドレスを着込み、楽しそうにどぎついメイクをしているトレイシーとニコル。

大人っぽくなった互いを見て、満足気な二人。

78　ソフィーの携帯スクリーン

「パパ活」サイトに掲載されたソフィーの日本の女子高生風顔写真。
その横に、スペックが羅列されている。
（素敵なパパさんいないかな。一緒にいろいろ楽しめたらいいな。詳細はメールでね！）
（名前）楓
（年齢）１９歳
（職業）大学生
（地域）東京近辺
（身長）１５８㎝
（体型）普通
（血液型）Ａ型
（性格）カッコキレイ系
（交際目的）内緒（ウフフ）
（趣味）クラブで踊ったり
（お酒）教えてね！
（好きなタイプ）甘えさせてくれる人

79　クラブ「ラッシュ」・中（夜）

ダンス音楽がけたたましく鳴り響く中、大勢の客で賑わっている店内。
男子生徒の洋次、貴雄、グスタボにエスコートされて、トレイシー、ニコル、ライラの女子三人が、煌びやかなドレスで入店して来る。
周囲の男性たちの視線がいっせいに女子三人へと向けられる。

80　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

日本の女子高生風メイクを落としたソフィーが携帯で「ラッシュ」にいるニコルと話している。
ソフィー「六本木のクラブって？」

８１　クラブ「ラッシュ」・表（夜）

ニコルがドア口の外に立って、携帯でソフィーと話している。

ニコル「エル・マーメイドってクラブ。そこでホステスしてた子に間違いないって言うの」

ソフィーの返事を待つニコル。

ニコル「来れるの？」

８２（シーン８０に同じ）

ソフィー「私はこんな時間には無理だけど」

ソフィー、ニコルの返答を待つ。

ソフィー「わかった、洋次に頼んでみる。ありがとう。また明日ね」

通話を切って、思惑気なソフィー。

８３　六本木・クラブ「エル・マーメイド」・表（夜）

雑居ビルの七階、エレベーターを降りた踊場を抜けたところの鉄の扉に「ＥＬ　ＭＥＲＭＥＩＤ」とサインがある。

８４　六本木・クラブ「エル・マーメイド」・中（夜）

入り口ドアを抜けると別世界。

照明は意図的に幻想的に落とされており、その中を華やかに着飾ったホステスたちが熱帯魚が水槽の中を遊泳するかのように歩き回っている。

８５　六本木・クラブ「エル・マーメイド」・ＶＩＰルーム（夜）

ソフィーと洋次、そして「ラッシュ」のバーテンダー、ヨシオが肘掛け椅子に座り、ローテーブルを挟んだ反対側のソファには、「エル・マーメイド」のオーナー、サングラスで強面を隠した川口が掛けている。

川口「（不機嫌そうに）なるほど、それで君たちはジェシーと仲良くしてた客のことを知りたいのか」

川口の威圧的な態度に、ソフィーと洋次はかしこまった表情。
川口「しかしね、客のことを第三者に教えることは、我々の業界ではご法度なんだよ。それくらいはわかるよね」
ソフィー、洋次と顔を見合わせる。
川口「そうか、行方不明なんだね。突然店に来なくなったんで、どうしたのかとは思ってたんだが」
川口、タバコに火を点け、苦々しい顔で煙を吐き出す。
川口「それで君たちは、これからどうするつもりなの？」
洋次、答えあぐねてソフィーを見る。
ソフィー「（川口に）自分たちで解決できなかったら、警察にお願いするしかないと思ってます」
川口、顔を顰めてヨシオを見る。
恐縮した表情のヨシオ。
川口「（重い口調で、ソフィーに）どうだろう、できるだけの協力はするから、警察への通報は控えてくれないか？」
ソフィー、理解できないといった表情で首を傾げる。
川口「うちは客商売だからね、それにこの店の形態からして、秘密厳守のお客さんもいるんだよ。ジェシーが未成年だったということも、私は今知ったんだからね。もし、警察沙汰になるようなことになったら、うちは潰れるよ」
ソフィー「でも、ジェシーのママがもう警察には相談してます。警察は家出人として捜索してるだけって聞いてますけど」
川口「いや、私が言ってるのは、この店のことだ。警察には言わないで欲しい」
ソフィー「私たちは、ジェシーの居所さえわかればいいので」
川口「私も居所は知らないよ。だけどね、彼女が接客していた客の名は知ってる。住所もね。うちは

クォリティとセキュリティが売りなので、メンバーになるのには免許証とか本人確認が必要なんだよ」
ソフィー「例外はないんですか？」
川口「例外は、客に連れて来られた客だね。これはいちいち身分証明なんか求めてないよ」
ソフィー「じゃ、その中にジェシーと仲良くなった人もいるわけですね」
川口「まあ、ゼロとは言わないけどね。うちで働いている子には、外で客に会っちゃいけないとかってルールはないからね。ただ、常連じゃないなら可能性は低いんじゃないかな」
川口、サングラスを外し改めてソフィーをしげしげと見る。その目に敵意はなく、むしろ優しい。
川口「その前に、関係あるかもしれないから、私が彼女をここで雇うようになった経緯を説明しておいたほうがいいだろうね」
ソフィーと洋次、身を乗り出す。

86（フラッシュバック・川口の記憶）
クラブ「エル・マーメイド」・中（夜）
入り口ドアを開けて、ジェシーと中年男（赤沢巧）が連れ立って入店してくる。
既に男女の関係がありそうな二人の様子。
川口の声「私がジェシーを紹介されたのは、昨年の秋口だったかな。赤沢といううちのクラブの客が連れてきて、ここで働かせて欲しいって頼まれたんだ」
赤沢、立ったままジェシーを傍に、川口と何か会話している。
川口の声「ちょうどホステスが大量に辞めてしまった時でね。人手不足だったし、客の頼みだし、あの子も大人っぽくてハーフでスタイルが良かったからね。私もあまりチェックせずに、彼女をここで雇ったんだよ」

露出度の高いドレスを着て、笑顔で接客に励むジェシー。
川口の声「エミリーって名前で店に出てもらうことにしたんだけど、若いし、可愛いし、すぐに人気者になったね」

87（シーン85に同じ）

ソフィー「（川口に）その赤沢って人、何か知ってる可能性がありますよね」
川口「（眉を顰めて）それがね、作年の十一月にうちを解約して、連絡が取れないんだ」
ソフィー「え？」
　ソフィーと洋次、顔を見合わす。
川口「いつだったか、ご挨拶のメールを送ったけど返信がなかったし、確か電話も通じなかったかな。自由業だって言ってたから、勤め先とかも私は知らないしね。まあ、それっきりにしてるんだけど」
ソフィー「その赤沢って人とジェシーはどこで知り合ったんですか？」
川口「そこまでは詮索してないよ。プライベートなことだからね。しかし、ジェシーを贔屓にしていた客は、赤沢以外は皆まだここのメンバーだからね。話を聞こうと思えば難しいことじゃないよ」
ソフィー「話させていただけますか？」
川口「いや、直接話してもらうのは困る。顧客情報を漏えいさせたってことがわかったら、大問題だからね。だけど、私が話を聞くことはできる」
　ソフィー、戸惑ったように洋次を見る。
川口「君たちの頭の中は読めるよ。私が話を聞くって言っても、信用できないんだろう？　だけどね、考えて欲しい。私は君たちがこれを警察沙汰にするのが一番困るんだ。特に私の店の名前を出してもらっちゃ困る。それを止めてもらうには、私が君たちの納得の行く聞き込みをするしかないと思わないか？」
　洋次がソフィーに頷き、ソフィーが頷き返す。
川口「私が話を聞いて、もし怪しいと思うような人間

がいたら、君たちに真っ先に知らせるよ。これは約束する」
川口、笑顔でソフィーに握手を求める。
ソフィー「（笑顔で川口の手を握りながら）よろしくお願いします」

88　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ソフィーがデスクに向かい、物憂げにスマホのスクリーンに見入っている。
ラインメッセージには「パパ活」メッセージが並んでいる。
（パパ活希望だよ）
（定期的にサポできるよ）
（フェラ、手コキだけで1なら出せるよ）
（ゴムあり、本番で2はどう？）
（一晩付き合ってくれて、回数制限なしなら5は出せるよ。生中出しが条件だけどね）
（クラブよく行くよ。銀座だけどね）
（足ありだよ。都内なら基本いつでもどこでもオーケーだよ）
（新宿、渋谷あたりで、今日、ホ＆3でゴムなし本番どう？）
（顔合わせで、1はどう？）
ソフィー、顔を上げボンヤリと外を見る。
携帯に着信音があり、スクリーンを見直してから、通話をＯＮにするソフィー。
ソフィー「もしもし？」
男の声「（スピーカーフォンから）あ、ソフィーちゃんかな？」
ソフィー「（訝しげに）はい」
男の声「僕、西野屋といいます。ジェシーちゃんのお母さんから頼まれてジェシーちゃんの行方を追っている者です」
ソフィー「探偵？」
男の声「（少し笑って）まあ、そういうことになるね。どうだろう、放課後でいいから少し時間をく

れないかな？」

８９　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋・窓の外
（夜）

デスクで携帯に向かい、西野屋との会話を続けているソフィー。
窓の外からは、声は聞こえない。

９０　下北沢・某カフェ・中（夕方）

ソフィーがテーブル席に座り、スマホを見ながら何かしている。
テーブルの上には、ストローの刺さったドリンク。
アタッシュケースを手にした中年男（西野屋）が入店し、ソフィーを見つけて歩み寄る。

西野屋「（作ったような笑顔で）ソフィーちゃん？」
ソフィー、顔を上げて警戒したように頷く。
西野屋「（ソフィーの正面に席を取りながら）良かった。今日は時間作ってありがとうね」
ソフィー「（ぎごちなく微笑んで）いいえ」
西野屋「さっそくだけどね、いろいろジェシーちゃんのことについて教えて欲しいんだ」
西野屋、そそくさとアタッシューケースから書類を取り出す。
西野屋「（書類を見ながら）君はジェシーちゃんと一番仲が良かったって聞いたけど」
ソフィー「（不審そうに）昔のことです。最近はそんなことありません」
西野屋「そう、喧嘩して仲が悪くなったんだね」
ソフィー「喧嘩じゃないです」
西野屋「だいたいのことは、絵里子さんから聞いてるよ。そんなことがあったなら、ジェシーちゃんを恨むよね？」
ソフィー、戸惑ったように西野屋を見つめる。
西野屋「君は一生懸命ジェシーちゃんを探してるって聞いたんだけど」

ソフィー「それは友達だから」
西野屋「それだけ？」
ソフィー「どういうことですか？」
西野屋「（苦笑して）いや、他に理由がなければそれでいいんだけどね」
西野屋、表情の変化を窺うようにソフィーの顔を凝視する。
ソフィー「（不快を露わに）私を疑ってるんですか？」
西野屋「（狼狽して）いや、特に君だけってわけじゃないよ。こういうことが起きた時は、関係者全員を疑うのが仕事だから」
ソフィー、不満げに西野屋から目を逸らす。
西野屋「（口ごもりながら）どうだろう、君の携帯の通話記録、僕に見せてくれないかな」
ソフィー「は？」
西野屋「携帯電話の会社に本人がリクエストすれば、過去三ヶ月ぶんの通話記録を見せてもらうことができるんだ。協力してくれないかな？」
ソフィー「どうして私がそんなことしないといけないんですか？」
西野屋「そうすれば、疑いが晴れるよ」
ソフィー「（硬い表情で）両親に相談してみます」
西野屋「（慌てふためいて）いや、それはしなくていい。そこまで君を疑ってるわけじゃないよ」
ぎこちない沈黙が流れる。

91　ソフィーの学校・校庭（昼）

ソフィーがベンチに腰掛け、サンドイッチを頬張りながらグランドでサッカーに興じている生徒たちを見ているところに、トレイシーが心配そうな顔でやって来る。
トレイシー「ソフィー」
ソフィー、顔を上げる。
トレイシー「今、校長室に呼ばれて来た」
ソフィー、不可解な表情。
トレイシー「ジェシーを私たちが探してること」

ソフィー「それがどうしたの？」
トレイシー「やめたほうがいいって」
ソフィー「どうして？」
トレイシー「例の私立探偵。学校中の生徒に連絡したらしい。それで結構、大騒ぎになってるみたい」
ソフィー、サンドイッチを食べ終え、立ち上がる。
ソフィー「（不満そうに）どういうこと？　学校と関係ないじゃん」
トレイシー「親が騒ぎ始めたのよ。ジェシーが行方不明だってことも知らなかった親が多かったから。誘拐事件なのか、うちの子も危ないんじゃないかって。ほら、この学校、金持ちの子多いしさ、有名人の子とかもいるから」
ソフィー「（少し笑って）あなたとか、洋次みたいな？」
トレイシー「笑い事じゃないわ。ソフィーも校長室に呼ばれると思う」
ソフィー、眉を顰める。

92　ソフィーの学校・校長室（昼）

大きなデスクの向こう側に校長が座り、ソフィーが反対側に立っている。
校長「（苦しそうな笑顔で）親御さんたちの心配もわかるだろう？　君が捜索を主導してるそうじゃないか」
ソフィー「（緊張の面持ちで）私が捜しても捜さなくても状況は変わらないですよね。誘拐事件だとして、犯人がまたうちの生徒を狙うんだとしたら」
校長「（厳しい顔で）これが犯罪なら、君が捜査を続けることで犯人を刺激するかもしれないだろう？」
ソフィー、無言で首を傾げる。
校長「どっちにしても、こういったことは専門家に任せて、君は勉強に集中すること。いいね？」
ソフィー、納得いかない表情で直立している。

93　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ベッドに横になり、半身を起こしてスマホのスクリーンに見入っているソフィー。

「パパ活」アカウントに、ラインメッセージがずらりと並んでいる。

（素敵なプロフィール見ました。ご希望の条件は全て叶えてあげることができます。一度、顔合わせいかがですか？）

（そちらの条件はどんなことなんですか？）

（あなたの希望に合わせますよ。いやなことはいっさいしません）

（どちらの方なんですか？）

（東京近郊ですが、どこでも行きますよ。あなたのような人を探していたので）

（あまりプライベートな場所だと、ご心配でしょうから、公園とかで待ち合わせしましょうか？　ご一緒にお食事でもいかがですか？　もちろん全てこちら持ちということで）

（新宿の歌舞伎町近くに大久保公園という場所があります。そこで午後五時でどうですか？　もっと早い時間とか、遅い時間でも大丈夫です）

ソフィー、スマホから顔を上げ、考える仕草。

94　新宿大久保公園（夕方）

ひっきりなしに人の往来を見る大久保公園近辺。

目につくのが大久保病院の裏手にスマホを手にして人待ち顔で立つ少女たち。

時折、男性が歩み寄り、少女たちに話しかけている。

少女たちの列に混じって立つソフィー。前髪を下ろし、日本の女子高生風の装い。

男たちが、ソフィーにもアプローチをかけている。

笑顔で首を横に振るソフィーだが、表情に不

安といらだちが見える。
ひとりのスーツ姿の中年男がソフィーの目の前に立つ。スマホから顔を上げるソフィー。
中年男「楓ちゃん？」
ソフィー、訝しげに頷く。
中年男「（優しく微笑んで）よかった。お茶でも、どう？」
ソフィー「（戸惑いながら）あ、はい」
ソフィー、中年男と連れ立って歩き去る。

95　某ホテル・カフェレストラン（夕方）

カフェレストランと外界を分けるガラスパネルの向こう側は、大久保公園傍の道を行き来する人々が気忙しい。
逆にこちら側は、客の姿もまばらで、水を打ったように静かである。
テーブル席には、ソフィーと中年男の姿。テーブルの上には、ドリンクが並ぶ。
中年男「（意味深に微笑みながら）もうパパ活は長いの？」
ソフィー「（うつむきがちに）いえ、そんなには」
中年男「（覗き込むように）お金に困ってる？」
ソフィー「ええ、まあ」
中年男「条件を聞きたいんだけど」
ソフィー「（戸惑いを隠せず）条件？　ですか？」
中年男「うん、大人の条件ね」
ドギマギしているソフィーを、冷たい表情で見つめる中年男。
ソフィー「（小声で）以前は、一晩五万円でお願いしてました」
中年男「（ニヤリと笑って）それが条件なのね？」
ソフィー「（上目づかいに）はい」
中年男が何かを内ポケットから出してテーブルの上に置く。
それを見て、青ざめるソフィー。
その「何か」は警察手帳である。

９６　新宿警察署・取調べ室（夜）

アルミ製のデスクが一台、折りたたみ式のパイプ椅子が二脚、ビニール地の長椅子が一台だけの殺風景な部屋。

ソフィーが椅子のひとつに座り、対面して警察手帳を所持していた中年男が座している。

中年男は、新宿警察署の小林警部補である。

小林「（厳しい口調で）いい加減な嘘はつかないほうがいいよ」

ソフィー「（怒ったように）嘘じゃないです。本当に行方不明の友達を探してるんです」

小林、呆れたようにソフィーを見つめる。

ドアにノックがあり、入室してきた若い婦人警官が小林に耳打ちする。

小林、驚いたようにソフィーを一瞥して立ち上がり、婦人警官と共に部屋を出る。

不安そうに室内を見回すソフィー。

しばらくして、再びドアにノック。

ソフィーが顔を上げると同時に、刑事の諏訪が入室する。

ギロリとソフィーを見る諏訪。

ソフィー、びっくりしたように姿勢を正す。

諏訪「（腰掛けながら、笑顔で）刑事をしてる諏訪という者です」

ソフィー、黙って頷く。

諏訪「あなたの友達、ジェシー・ターナーさん、かな。捜索願いが原宿署に提出されていたことが確認できたんでね。どうだろう、少し詳しい話を聞かせてくれないかな？」

ソフィー、緊張の面持ちで頷く。

９７　ソフィーの学校・校庭（昼）

ソフィーとトレイシーが連れ立って校庭を歩いている。遠景に、グランドを走り回っている生徒たち。

トレイシー「大変な経験したんだね」
ソフィー「（頷きながら）親に知られたのが一番の問題。しばらくは何もできないかも」
　トレイシー、同情したように頷く。
トレイシー「洋次が尋ね人情報ＳＮＳで拡散したの知ってる？」
ソフィー「（立ち止まって）え？」
トレイシー「（立ち止まり、笑って）やっぱり言ってないのね」
ソフィー「どういうこと？」
トレイシー「ソフィーに言ったら反対するから言わないでって言われた」
　ソフィー、不満げな表情。
トレイシー「でも結果的には良かったんじゃない？」
ソフィー「どうして？」
トレイシー「だって、あなたも私も学校から目つけられてるし、でも、何かしてないと不安だしね。洋次が何かしてくれてるんだから」
ソフィー「それで何か情報はあったの？」
トレイシー「よくわからないわ。まだ拡散し始めたばかりだし、洋次に聞いてみて」
　ソフィー、渋い顔で頷く。

９８　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

　ソフィー、デスクに向かい教科書を広げ、ＰＣに向かって勉強している。
　傍のスマホに着信があり、番号を確認してからスピーカーフォンをＯＮにするソフィー。
川口の声「（スピーカーフォンから）あ、ソフィーちゃんかな？」
ソフィー「はい」
川口の声「エル・マーメイドの川口だけど」
ソフィー「あ、はい」
川口の声「うちのお客さんで、あなたの話に興味を持った人がいてね。是非、あなたと話したいと言ってるんだけど、どうしますか？」

ソフィー「(訝しげに) ジェシーのことですか？」
川口の声「もちろん、そうだけど。一対一じゃ不安なら、私も同席するよ」
ソフィー「川口さんのクラブでですか？」
川口の声「まあ、それが一番いいと思うけど、場所や日時はあなたに任せるよ」
ソフィー「わかりました。またご連絡します」
ソフィー、通話を切り、考えるように暗い窓の外に目を向ける。

99　六本木・クラブ「エル・マーメイド」・応接室（昼）

ソフィーが一人で応接椅子に座っている。目の前のローテーブルには、コーラの入ったグラス。
ドアにノックがあり、ソフィーが顔を上げると、川口に先導されてひとりの中年男が入室してくる。
以前、クラブ「ラッシュ」でソフィーの隣に座り、話かけてきた男である。
川口「(笑顔で) いや、お待たせしました」
川口がソフィーの正面に座り、隣に男が腰掛ける。
川口「(隣の男を紹介する仕草で) こちら村瀬さん」
村瀬「(笑顔でソフィーに) 久しぶりだね」
ソフィー、なんとなく頷く。
村瀬「覚えてる？」
ソフィー「(小さく) はい」
村瀬「エミリーの行方がわからないんだってね」
ソフィー「はい、本名はジェシーですけど。一月の中頃から、行方不明になってます」
村瀬「もう二ヶ月になるんだね」
ソフィー、頷く。
村瀬「君の話を川口さんから聞いてね、きっとあの時の子だってピンっと来たよ」
村瀬、川口に目で笑いかける。

村瀬「僕が初めてエミリーを見たのは作年の九月だったね。酒はあんまり飲めないようだったけど、若いのにしっかりしててね。隣に座っているだけで、なんかこう癒し系っていうのかな、変な冗談を言ったり、見えすいたお世辞も言わないし、僕が落ち着いて一緒に飲める子だったね」

村瀬、遠くを見るように目を細める。

ソフィー「ラッシュには一緒によく行かれたんですか？」

村瀬「ラッシには確か二回連れて行ってるよ。だけど、そんな話より、僕が君に伝えたかったのはね、エミリーにはパトロンがいたってことだよ」

ソフィー「（半身を乗り出して）パトロン？　ですか？」

村瀬「（苦笑して）君にこんな話をするのも恥ずかしいんだけどね、何度かエミリーをホテルに誘ったんだよ。だけど、『私にはパトロンがいるので』って断られてね」

ソフィー「はい」

村瀬「まあ、それで僕は彼女を諦めたってことだ」

ソフィー、戸惑いを隠せず川口を見る。

ソフィー「（川口に）赤沢って人ですか？」

川口「それがよく私にもわからないんだよ。赤沢は確かに『自分の女だから』って言って、私にジェシーちゃんの雇用を依頼してきた。だけどね、彼のような人間がだよ、出会い系サイトで知り合った女性をそんなに簡単に『自分の女』にするだろうかっていう疑問が残る」

ソフィー「え、どういうことですか？」

川口「前にも言ったように、この店のメンバーは、身元のはっきりした人間がほとんどなんだよ。赤沢も住所もあり、住民票もあり、収入証明もあった。自由業の内容までは詮索しなかったけどね。そんな人間には、異性との出会いはいくらでもある。ここのホステスが良い例だけどね。

まあ、仮に彼が何かの理由で、出会い系を使ったとしても、そこで知り合った女性を愛人にするだろうか。出会い系なんかを使ってる子には素人も多い。素性もわからない。それこそジェシーみたいな未成年もいる。リスクがあり過ぎると思うんだよね」

ソフィー「え、じゃ、パトロンっていう人が別にいたってことですか？」

川口「その可能性が高いかもしれない」

ソフィー「あの、その赤沢さんの写真とかってありますか？」

川口「残念だけど、写真はない。以前は防犯カメラを店の入口に設置して、記録も三ヶ月保存してたんだけど、今は個人情報保護が厳しいからね、客からのクレームがあって、それもだいぶ前にやめちゃったんだよ」

ソフィー、残念そうに頷く。

100　下北沢・某カフェ・中（夕方）

ソフィーが洋次と隣り合わせでテーブル席に座り、私立探偵の西野屋と対面している。テーブルの上には、オーダーされた三種のドリンク。

西野屋「（イライラした様子で、ソフィーに）それで、大事な話って何？」

ソフィー「（平然と）捜査の進展はどうなってるんですか？」

西野屋「（憤慨したように）そんなことは教えられないよ。僕とクライアントの間のことだからね」

ソフィー「私、警察に行ったんです」

西野屋「え？　警察にはもうターナーさんが話をしてるよ」

ソフィー「情報提供です。（洋次を見ながら）ＳＮＳで目撃者情報がだいぶ集まったので」

西野屋「（目の色を変えて）目撃者情報？」

洋次「世界中に尋ね人広告を拡散したんです。でも寄

せられた情報が膨大で、僕たちにはどうしようもないので、国内からのものは警察に解析してもらおうってことになって」
西野屋「警察は、そんなものを見せられても何もしないと思うけど。どうだろう、僕にその情報をくれないかな。何かの役に立つかもしれない」
ソフィー「いいですけど、こちらからもお願いがあります」
西野屋「何？」
ソフィー「ジェシーの通話記録が見たいんです。ジェシーの携帯の契約者は絵里子さんのはずだから、見れますよね？」
西野屋「（冷笑的に）調べても何も出ないよ」
ソフィー「私たちが見れば、何か見えるかもしれないから」
西野屋「それは別に構わないけどね。過去三ヶ月ぶんのリストなら持ってるから。だけどね、仮に怪しい番号とか見つけても、携帯会社はその相手が誰かまでは教えてくれないよ。キャリアが同じでもね。個人情報だから。それこそ警察じゃないと教えてくれない。あとね、これがもし犯罪だったら、犯罪者はとっくに携帯番号なんて変えてるよ。足はつかないと思う」
洋次「じゃ、警察に持っていって携帯会社に要請すればいいんじゃないですか？」
西野屋「いや、警察だって裁判所の許可が下りなければ、個人情報の開示は要求できないよ。捜査令状と同じだよ。それにね（ソフィーに）こないだも君が言ってたように、今は通話なんてラインやフェースブック上でもできるからね、携帯の通話記録だけじゃ、不十分だし、多分、無意味だろう」
　　ソフィー、洋次と顔を見合わせる。
西野屋「だけど、目撃者情報は別だ。ジェシーちゃんが生きていれば、どこかで生活してるはずだから、誰かに見られてもおかしくはないわけだよ。まあ、がんじがらめに縛られてるとか、檻に入れ

られてるとかなら話は別だけど。それだって食事をしたり排泄したりはしなければならないわけだから」
ソフィー、不快そうに顔を歪める。
ソフィー「もうひとつ、あるんですけど」
西野屋、首を傾げてソフィーの言葉を待つ。
ソフィー「ジェシーにパトロンがいたんじゃないかっていう噂があるんです」
西野屋「え？　それってどういうこと？」
ソフィー「エル・マーメイドのお客さんから聞いたことですけど」
西野屋、姿勢を正してソフィーの言葉に聞き入る。

101　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ソフィーがデスクの上のＰＣに向かって何かしている。
トムの声「（階下から、緊迫した声で）ソフィー、おいで」
ソフィー、何事かと顔を上げる。
ソフィー「は～い」
足早に部屋を出るソフィー。

102　ソフィーの自宅・リビングルーム（夜）

トムが立っているところに、ソフィーが階段を駆け降りてくる。
堅い表情のトム。手にはスマホが握られている。
トム「今、新宿警察の諏訪さんから電話があった」
ソフィー、不審そうに眉をしかめる。
トム「こないだソフィーをうちまで送ってくれた、あの刑事さんだよ。覚えてるね？」
ソフィー、頷く。
トム「赤沢っていう人、知ってるの？」
ソフィー「うん、ジェシー関連で」
トム「死体が発見されたそうだ」

ソフィー「（目を丸くして）え？」
トム「また自然死なのか殺人なのかはわからないそうだ。赤沢っと人のこと、ソフィー以外に知ってる友達はいるの？」
ソフィー「（ためらうように）トレイシーとか洋次とか」
トム「そうか。もし殺人だったとしたら、トレイシーや洋次くんに気をつけるように言ったほうがいいかもしれない」
ソフィー「（不安そうに）いつ殺人かどうかがわかるの？」
トム「それは警察の検死しだいだと思うけどね。とにかく明日から学校へはママに車で送ってもらいなさい」
ソフィー、納得したように頷く。

１０３　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ソフィーがスマホをデスクの上に置き、トレイシーと洋次の両方と会話している。
トレイシーの声「注意しろって言われても、どうしていいのかわからないよ。学校休むわけにいかないし」
洋次の声「殺人って決まったわけじゃないんだし。それに殺人だったとしても、僕たちがジェシーのこと調べてることなんて、犯人は知らないかもしれないだろ？」
ソフィー「（困ったように）それはそうなんだけどね」
ソフィー、通話を切りしばらく考える仕草。思い立ったように、電話番号を検索し、電話をかける。
西野屋の声「もしもし？」
ソフィー「（控えめに）私、ソフィーですけど」
西野屋の声「ああ、赤沢のこと聞いたんだね？」

１０４　西野屋の自宅・リビングルーム（夜）

部屋着でくつろいだ様子の西野屋。
テーブルの上にスマホを置き、ソフィーと通

話している。
ソフィーの声「はい」
西野屋「そうか、驚いただろうね」
ソフィーの声「事件なんですか？」
西野屋「（しばらくためらって）実はね、死体を発見したのは僕なんだよ」

１０５（シーン１０３に同じ）

ソフィー「え？」

１０６（ＳＰＬＩＴ　ＳＣＲＥＥＮ）

ソフィーの部屋と西野屋のリビングルーム

西野屋「君に赤沢のことを聞いてから、彼をずっと追っててね、彼のマンションにたどり着いた。郵便受けに郵便物が放置されててね、まあ管理人に言って、部屋の鍵を開けてもらって死体を発見したんだ」
絶句するソフィー。
西野屋「死後三ヶ月は経過してる。真冬だからかなりミイラ化しててね」
二の句が継げないソフィー。
西野屋「まあ、自然死なのか殺人なのか、そのうちに結果が出ると思うけどね」
ソフィー「赤沢さん本人に間違いないんですか？」
西野屋「それも含めて、はっきりわかるよ」

１０７（シーン１０３、１０５に同じ）

ソフィー、西野屋との通話を終え、心配そうに宙を眺める。

１０８　ソフィーの学校・グランド（昼）

ソフィーがチームメイトとサッカーの練習をしている。
遠方から、手を振ってソフィーを呼ぶトレイシー。顔が硬直している。
ソフィー、トレイシーの姿を見つけ、練習を中断して何事かと駆け寄る。

トレイシー「（若干、青褪めた顔で）殺人だったって」
ソフィー「え？」
トレイシー「赤沢って人。殺人だったって。今さっき、ニュースで」
ソフィー、絶句してトレイシーを見る。
トレイシー「明日から学校、休校になるらしい」
ソフィー「え、どうして？」
トレイシー「赤沢って人が、ジェシーの行方不明と関係してることが学校に通報されたみたいなの。それで誘拐事件なんじゃないかって、他の生徒は大丈夫なのかって親たちが騒ぎ始めて。臨時休校」
ソフィーのスマホに着信音がある。見るとトムからの電話。
ソフィー「（スマホを耳に当てて）もしもし」
トムの声「（張り詰めた様子で）ソフィー、大丈夫？」
ソフィー「ニュース、今聞いたの」
トムの声「パパは諏訪さんからさっき聞いたんだ。今日はパパが迎えに行くから、そのまま待機してなさい」
ソフィー「わかった」
緊張の面持ちで、互いを見るソフィーとトレイシー。

109　ソフィーの学校・校長室（昼）

しかめっ面の校長がソフィーとトレイシーに対峙している。
神妙顔のソフィーとトレイシー。
校長「（重々しく）いったいどういうことになってるのか、君たちの知ってることを全部話して欲しい」
トレイシー「（ソフィーを横目に）私たちもよくわからないんです。さっきニュースで聞いたばかりなので」
校長「（ソフィーに）そうなのか？」
ソフィー、黙って頷く。
校長「君にはジェシーの捜索はやめて、勉強に専念するように言ったはずだよね？」

ソフィー「警察から学校に連絡が来たんですか？」
校長「（顔を曇らせて）そうだよ。殺された人物が、ジェシーと関係があるってね」
ソフィー「やっぱりジェシーは誘拐されたんですか？」
校長「いや、警察はそこまでは言ってなかったけどね。臨時休校にしたのは、状況を把握するまで万が一の措置だよ。私の判断だ」
ソフィーとトレイシー、顔を見合わせる。

１１０　トムの車・中（昼）

トムの運転で、制服姿のソフィーを助手席に乗せての帰宅途中。
トム「ママが心配してるから、家に帰ったら何か言われるかもしれないよ」
ソフィー「警察は何だって？」
トム「諏訪にも用心するようには言われたよ」
ソフィー「そうじゃなくて、殺人事件のこと」
トム「詳しいことは教えてくれないよ。捜査上のことだからね。ただ、もしかすると、所轄の警察署から連絡があるかもしれないって言ってたよ。その時は、パパも同行するから」
ソフィー「所轄って？」
トム「ああ、赤沢が発見されたのが、南池袋だからね。担当の警察署は池袋警察署とか、目白警察署になるんだろうね」

１１１　トムの車・外（昼）

ソフィーを助手席に乗せ、トムの運転で街路を走る高級車。

１１２　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（昼）

ソフィーがスマホをデスクの上に置き、西野屋と通話している。

１１３（ＳＰＬＩＴ　ＳＣＲＥＥＮ）

ソフィーの部屋と西野屋の事務所（昼）

探偵事務所らしい西野屋の部屋。
デスクに向かって腰掛けている背広姿の西野屋。

西野屋「そうか、学校が休校になったのか」
ソフィー「はい、警察から連絡が行ったらしいです」
西野屋「まあ、当然の措置かもしれないね」
ソフィー「詳しく教えていただけますか」
西野屋「僕が知ってる限りだけどね。警察の科捜研から上がって来た結果によると、薬品の注入による殺人だそうだ。猛毒だけどね。ＤＮＡ鑑定で、赤沢本人に間違いないということらしい。まあ、恐らく睡眠薬で眠らせた後に、毒物を注入したんだろうね」
ソフィー「よくわからないですけど」
西野屋「（少し笑って）専門的なことだからね。簡単に言えば、犯人は赤沢と顔見知りだった可能性が高い。あとは、医療関係者かな」
ソフィー「医療関係者ですか？」
西野屋「まあ、医者か獣医か、看護師の可能性もあるね。あの毒物は市販されてないからね」
ソフィー「防犯カメラに犯人が写ってたとかなかったんですか？」
西野屋「あのマンションは古いマンションなんだ。オートロックじゃないし、防犯カメラは付いてないんだよ。目撃者情報もないみたいだし、あとは犯行の動機を詰めていくしかないんじゃないかな。とにかく捜査継続を待つしかないね。僕は僕なりに調べてみるけどね」
ソフィー「あの、私たちが狙われるってことはないんでしょうか？　両親が心配してるので」
西野屋「まあ、ゼロとは言わないけどね。殺人事件っていうのは、わかると思うけど、大変なことなんだよ。警察だって本気で捜査するからね。逮捕されて有罪になれば、死刑になることだってある。だから犯人だって慎重になると思うよ」

１１４（シーン１１２に同じ）

ソフィー、通話を終え、物憂げな様子。

115　ソフィーの自宅・ダイニングルーム（夜）

ソフィー、トム、咲恵が食卓を囲んで夕食をとっている。

ソフィー「（トムに）今日、私立探偵の人と話したの」

ギョッとして、ソフィーを見る咲恵。

トム「（驚いたように）西野屋って人？」

ソフィー、頷く。

トム「どんなこと？」

ソフィー「殺人には猛毒を使ったらしいって」

トム「猛毒？」

ソフィー「うん。市販されてない薬品なので、犯人は医療関係者か獣医じゃないかって」

咲恵「（大声でソフィーに）やめてちょうだい。そんなことどうしてあなたが知る必要があるの？」

ソフィー、あまりの剣幕に咲恵を見る。

咲恵「（トムに）あなた、言ってやって。すぐにジェシーの捜索はやめるようにって」

トム「（苦笑して）いや、諏訪刑事は何も教えてくれなかったからね。俺にも興味がある」

咲恵「（呆れたように）あなた！」

116　トムの車・中（朝）

トムが運転する車が街中を走る。助手席には、制服を着たソフィー。

トム「思ったより早く休校が解除されたな」

ソフィー、頷く。

トム「まあ、今日から通常通りだな」

ソフィー「私としては不満だけど」

トム「そう？」

ソフィー「うん。だって、この殺人事件とジェシーの行方不明が無関係だなんて、どうしても思えないよ」

トム「そうだけど、そう警察が判断したんだからね。専門家には専門家の知識もノーハウのあるんだよ」

１１７　ソフィーの学校近くの街路（朝）

トムの運転する車が停車し、制服姿のソフィーが降り立つ。

近くを歩いていたニコルがソフィーを見つけ、笑顔で駆け寄ってくる。

ハイファイブを交わす二人。

１１８　ソフィーの学校・校庭（昼）

片隅のベンチにひとり座り、ぼんやりとグランドを眺めているソフィー。

複数の生徒が、グランドを走り回っている平和な光景。

１１９　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（昼）

デスクの上に置いたノートＰＣに向かい、熱心に勉強しているソフィー。

スマホに着信音があり、手に取って見るソフィー。

西野屋のメッセージ（ジェシーちゃんの行方がわかりました。至急会いたいので、事務所に来てください。ただ、ジェシーちゃんの命に関わることなので、このことは警察にも友達にも絶対に言わないように）

ソフィー、スマホを手に飛び上がる。

しばらく迷ったように部屋の中を歩き回り、思いついたようにノートＰＣをバックパックに入れると、足早に部屋を出る。

１２０　ソフィーの自宅・リビングルーム（昼）

咲恵がソファに座り、何かしているところにソフィーが急足で階段を降りてくる。

何気なく見上げる咲恵。

咲恵「どこか行くの？」

ソフィー「トレイシーのところに勉強に行って来る」

黙って頷く咲恵を尻目に、部屋から玄関へと向かうソフィー。

121　電車・中（昼）

心配そうな顔のソフィーが、バックパックを背に電車に乗っている。

ソフィー、スマホを取り出し、メッセージを打つ。

ソフィーのメッセージ（絵里子さんもそこにいるんですか？）

車窓を流れる風景に目をやるソフィー。

返信音とともに、メッセージが返ってくる。

西野屋のメッセージ（はい、絵里子さんも待ってます）

ソフィー、納得したようにスマホをしまう。

122　西野屋の事務所近くの路上（昼）

タクシーを降り、スマホのスクリーンを見ながら歩き始めるソフィー。

123　西野屋の事務所近くの住宅街（昼）

スマホを片手に、キョロキョロしながら歩くソフィー。

124　西野屋の事務所・表（昼）

一軒の木造家屋の前で立ち止まるソフィー。

閉ざされたドアに「西野屋探偵事務所」の表札。

ソフィー、ドア脇の呼び鈴に手を伸ばす。

トムの声「（大声で）ソフィー！」

ハッと声の方角を見るソフィー。

遠方から猛ダッシュで駆け寄るトムの影。

ほぼ同時に、事務所内部からバタンと音。

何者かが走り去る音。

トム、ソフィーを目で制止したまま、事務所の裏手へと走り去る。

戸惑って立ち尽くすソフィー。

数十秒後、トムが息を切らして戻って来る。

トム「（ソフィーに）大丈夫か？」

ソフィー「（泣きそうな顔で頷いて）パパ、どうなっ

てるの？」

125　西野屋の事務所・裏（昼）

数人の警察官が気忙そうに歩き回る中、トムが私服の刑事らしき男と深刻な顔で会話している。

傍に、悲痛な顔のソフィー。

そして数台のパトカーと一台の救急車。

裏口のドアが開き、白布に覆われた西野屋の遺体が担架で運び出されて来る。

周囲には野次馬の姿。

トム、刑事から離れるとソフィーに歩み寄り、肩を抱き寄せる。

トム「（ソフィーに）殺されたのは西野屋だけだ。ジェシーはいない」

ソフィー、疲れた顔で頷く。

126　パトカー・中（昼）

制服姿の警察官が運転し、助手席には私服の諏訪が座っている。

後部座席に、トム。隣にうつらうつらしているソフィー。

諏訪「（トムに）なるほど、それでＧＰＳを使ってお嬢さんを追跡したんですね」

トム「ええ、友達の自宅は目黒ですから。ところがソフィーは新宿に向かっている。家内から電話があって、すぐに変だと思いました」

諏訪「西野屋さんの事務所はご存知だったんですね？」

トム「ええ、彼には一度会ってますからね。元刑事さんだったんですか？」

諏訪「ええ、優秀な方だったって聞きました」

トム「そんな方が、こんなふうに殺されるなんて」

諏訪「刑事だって人間ですからね。油断することもある。おそらく犯人は顔見知りだったんでしょう」

トム「犯人は、赤沢を殺害した人間と同一犯という理解でいいんでしょうか？」

諏訪「まあ、間違いないでしょう。お嬢さんもおびきよせて、殺すつもりだったんだと思います」
トム、眠りに落ちているソフィーを心配そうに見る。
諏訪「赤沢殺しは、かなり周到に計画したんだと思いますよ。ミスというミスはしていない。事前に防犯カメラの有無もチェックしているようだし、殺害した時間帯も、おそらく夜でしょう。ただ、初犯にしても薬物の致死量とかには詳しい人物だとは思います」
トム「やはり、医者とか医学生とかですか？」
諏訪「製薬会社の人間かもしれない」
トム「ジェシーの誘拐犯でもある」
諏訪「そこがうまく繋がらないんですよ。確かに赤沢はジェシーちゃんを最初にクラブ『エル・マーメイド』に連れてきた人物ですが、その後に二人の関係がどうなったのかがわからない。もし、ジェシーちゃんが赤沢の殺しに絡んでいるのだとしたら、赤沢を殺した犯人がジェシーちゃんのパトロンであった可能性もありますからね。ただ、これも憶測に過ぎないです」
トム「しかし、殺人を犯すって余程のことがないと」
諏訪「その余程のことがあったんでしょう。赤沢と犯人はおそらく知り合いだったようだから、赤沢が恐喝とかしていれば、動機は十分にあります。その証拠は今のところ上がってませんが」
トム「じゃ、西野屋さんが何か突き止めたんでしょうか」
諏訪「でしょうね。西野屋さんが何か突き止めて犯人にコンタクトを取った可能性がある。西野屋さんの携帯は押収されてますから、もしかすると通話記録から思ったより簡単に犯人が割り出されるかもしれません」
トム「そうだといいですね」
諏訪「ただ、犯人は稚拙なミスを犯しています。西野屋さんが犯人に何を話したのかはわかりませんが、ソフィーちゃんを狙うんであれば、あんなふうに事務所に誘き寄せるのは、無謀です。警察に通報されたら、自分の居場所を教えるようなものですからね。西野屋さ

んを殺害した後、ほとんど思いつきでやったんじゃないかな。事実、危うくあなたと鉢合わせになるところだった」
トム「犯人は、娘の命をまた狙ってくるんでしょうか？」
諏訪「今日こんなことがあったから、当面はおとなしくしてるでしょう。でも、手放しで安心はできませんから、しばらくはご自宅に警察官を配置しますよ」
トム「いいんですか？」
諏訪、頷く。

１２７　街路（昼）

トム、ソフィー、諏訪を乗せて疾走するパトカー。

１２８　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（昼）

ソフィーがベッドに半身を起こし、ノートＰＣで何かしている。
咲恵は、ベランダに出て洗濯物を干している。
家の前の路上には制服を着た警察官の姿。
咲恵、警察官の姿に顔を顰めると、部屋に戻って来る。
咲恵「（ソフィーに）ご近所迷惑ね」
ソフィー「（咲恵を見上げて）お巡りさんのこと？」
咲恵、頷く。
ソフィー「でも、いてくれたほうが安心じゃない？」
咲恵「それはそうだけど」
ソフィー「パパは何だって？」
咲恵「（迷惑そうに）ご近所の刺激になっていいんじゃないかって」
ソフィー、静かに笑う。

１２９　ソフィーの学校・校門前（朝）

警察の車が門前に停まり、制服姿のソフィーが降り立つ。
好奇の目でソフィーを見る生徒たち。
ソフィー、構わず学校へと歩いて行く。

１３０　ソフィーの学校・教室（朝）

ミンディ、ミッシー、ポーリーン、ライラ、ニコルが集まりひそひそ話をしているところに、平然と入室して来るソフィー。

わらわらと、ソフィーを取り囲む女学生たち。

ミンディ「（ソフィーに）大丈夫なの？」

ソフィー「（笑顔で）うん、ちょっと熱が出て寝てただけ。今は全然大丈夫」

ミッシー「警察の人に送迎されてるんでしょ？」

ソフィー「誰に聞いたの？」

ミッシー「トレイシーから聞いたわ」

ソフィー、仕方ないといったふうに眉を上げて頷く。

トレイシーが入室し、ソフィーに近づく。

トレイシー「ソフィー、校長先生が呼んでる」

ソフィー、またかといった表情で窓の外に目を向ける。

校庭にはまだ花をつける前の桜並木。

１３１　ソフィーの学校・教室（朝）

生徒たちの明るくわいわいと騒ぐ声が聞こえる。

窓の外の桜並木は満開。

１３２　ソフィーの学校・教室（昼）

生徒に混じって窓の外を物憂げに眺めているソフィー。

桜並木は、葉桜に代わっている。

１３３　ソフィーの自宅・ソフィーの部屋（夜）

ベッドで上半身を起こし、ノートＰＣで何かをしているソフィー。

大きくあくびをすると、ノートＰＣを閉じ、傍のスタディランプのスイッチを切ろうと手

を伸ばす。
そこにスマホへの着信音。
手に取って見ると「公衆電話」と通知されている。
ソフィーが無視していると、電話は切れる。
スタディランプのスイッチを切り、ベッドに横になるソフィー。
しばらくして、半身を起こし、スタディランプのスイッチを入れ、部屋を明るくするソフィー。
スマホを手にすると、駆け足で部屋を出る。

134　ソフィーの自宅・階段下（夜）

スマホを手に階段を駆け降りてくるソフィー。
トムの書斎の前に来ると、ドアをノックする。
トムの声「どうぞ」

135　ソフィーの自宅・トムの書斎（夜）

ソフィーがスマホを手に血相を変えて入ってくる。
トム「（何事かと）どうした？」
ソフィー「今、公衆電話から私の携帯に電話があったの。ジェシーだと思う」
トム「（呆気に取られて）どうしてジェシー？」
ソフィー「ジェシーは私の携帯番号知ってるから」
トム、戸惑った表情でソフィーを凝視する。
ソフィー「もし、ジェシーが監禁とかされてたら、携帯も持ってないわけでしょう？」
トム「多分ね」
ソフィー「だから、携帯に登録してる電話番号なんてわからないわけでしょう？」
トム「まあ、ほとんどは覚えてないだろうね」
ソフィー「だけど、ジェシーは何度も私と携帯とかフェースタイムで話してるからね。仲が悪くなる前は、一日に何回も。だから私の番号は、はっきり記憶してるんじゃないかなって」

トム、思慮深げに腕を組む。

136　トムの車・中（昼）

トムが運転し、ソフィーが助手席に座って車は街中を走っている。
ナビを見ながら、運転を続けるトム。

ソフィー「今日はありがとう」
トム「（微笑みながら）どうせ休日だからね」
ソフィー「どうしても自分の目で確かめたくて」
トム「いいんだよ。せっかく諏訪さんが調べてくれたんだから、公衆電話の位置だけでも確認したいのはパパも同じだからね」
ソフィー「でも、諏訪さんは、ジェシーからの電話じゃないって思ってるんだよね？」
トム「まあ、確率は低いだろうって話さ。だからこれ以上調べる必要はないって判断だろう。警察だって忙しいからね。不審電話を全部調べてたらキリがない」
ソフィー、納得しない顔で頷く。
トム「仮にあの電話がジェシーからだったとしても、たまたま通りかかった公衆電話かもしれないしね。そこにジェシーがいるっていう手掛かりにはならないからね」
ソフィー「公衆電話とかじゃなくて、その家の固定電話を使うはずだってことでしょ？」
トムが頷く。
ソフィー「でも、最近は固定電話のない家も多いよ」
トム「そうだけど、諏訪さんによると、その公衆電話は高級住宅街の児童公園にポツンとある電話らしいんだよ。そんなところに、ジェシーがあんなに夜遅く、ひとりで歩いて来て電話したとは考えにくいってことだよ。それにジェシーだったら、留守電だって残せただろう？」
ソフィー「留守電になる前に、誰かに連れ戻されたのかも」
トム「（苦笑し、首を傾げて）まあ、とにかく行ってみ

よう」

137　児童公園（昼）

トムの車が公園脇の路上に停まり、トムとソフィーが降り立つ。

公園の入り口近くに公衆電話ボックス。

周囲を見回すトムとソフィー。

公園は窪地のようになっており、周囲の高台には閑静な高級住宅街が広がっている。

ソフィー、公衆電話ボックスに歩みより、感慨深げに電話器に目を向ける。

138（フラッシュバック）

電話ボックス・中（夜）

ジェシーが受話器を握りしめ、必死の形相で番号をプッシュしている。

送信音が聞こえた時、背後から黒い人影がボックスのドアを開け、ジェシーの口を塞ぎ身体ごと外へ引き摺り出す。

139（シーン137に同じ）

我に帰ったように、電話器から目を離すソフィー。

トムが公園の周囲を散策している。

西野屋の声「簡単に言えば、犯人は赤沢と顔見知りだった可能性が高い。あとは、医療関係者かな」

ソフィーの声「医療関係者ですか？」

西野屋の声「まあ、医者か獣医か、看護師の可能性もあるね。あの毒物は市販されてないからね」

ソフィー、はっとして高級住宅街に視線を移す。

140（フラッシュバック・シーン126に同じ）

ソフィーが、パトカーの後部座席にうつらうつらしている。

諏訪「刑事だって人間ですからね。油断することもあ

る。おそらく犯人は顔見知りだったんでしょう」
トム「やはり、医者とか医学生とかですか？」
諏訪「製薬会社の人間かもしれない」
トム「ジェシーの誘拐犯でもある」

141（シーン137、139に同じ）
ソフィー、鬼気迫る眼差しで周囲を見回す。

142（フラッシュバック）
道玄坂（昼）
ジェシーと中年男が肩を並べて歩いている。
中年男の顔は見えない。

143（フラッシュバック・シーン125に同じ）
猛ダッシュで走り去る男の後ろ姿。
途中まで追ったトムが諦め、息を切らしながら戻って来る。

144（シーン137、139、141に同じ）
トムが散策から戻って来る。
ソフィーのただならぬ表情に、ハッとするトム。
ソフィー「（少し青ざめて）パパ、犯人がわかったの」
トム、さらに目を見開く。
ソフィー「犯人は、絵里子さんの恋人だよ」
理解できないかのように、ソフィーを見つめるトム。
ソフィー「考えて。犯人はジェシーのことをよく知ってた人でしょう？　西野屋さんのことも知ってた人なんだよね」
トム「諏訪警部はそう言ってたね」
ソフィー「西野屋さんが何を調べてたかも知ってた人だよね。だから西野屋さんを殺して、私も殺そうとしたんだよね」
トム、頷く。
ソフィー「だけど、西野屋さんと犯人の接点が全然わ

からないんでしょう？」
トム「今のところはね」
ソフィー「西野屋さんの調査内容の報告を受けていたのは、絵里子さん。メールとかでやり取りしてたのも絵里子さん。それを全部知ってたとしたら、絵里子さんの恋人しかいないと思う」
トム、得心したかように天を仰ぐ。
ソフィー「絵里子さんの恋人が、お医者さんとかだったら間違いないと思う。ここって高級住宅街なんだよね。お医者さんとかもきっと住んでるよね。ジェシーはきっとこの近くに監禁されてる」
トム、ポケットからスマホを取り出す。
トム「（重い声で）もしもし、諏訪警部お願いします」

１４５　高級住宅街の一軒家・表（昼）

正面の路上に複数のパトカーが赤色灯を回し、ものものしく停車している。
複数の制服姿の警察官が立ち、その周りを報道関係者に混じって付近の住民が取り囲むように見物している。
中に私服を着た諏訪の姿。
近くに、心配顔で立つソフィーとトムの姿。
少し離れて、涙顔の絵里子とリジーが肩を寄せ合って立っている。

１４６　某総合病院・表（昼）

正面玄関前に赤色灯を点滅させ停まる複数のパトカー。
玄関の自動ドアが開き、中から手錠をつけられた白衣の男が複数の警察官に脇を固められて出て来る。
その顔から、絵里子の愛人、鳥飼俊であることが見て取れる。
（ＳＴＯＰ　ＭＯＴＩＯＮ）

１４７（シーン１４５に同じ）

一軒家の玄関のドアが開き、毛布を頭から被せられた女性が複数の警察官に守られるようにして出て来る。
横顔から、女性がジェシーであることがわかる。
報道カメラから一斉に光るフラッシュの光。
ジェシーに駆け寄る絵里子とリジー。
涙顔で抱き合う三人。
少し離れて笑顔でそれを見守るソフィーとトム。
絵里子とリジーから離れ、パトカーに向かうジェシーが、ソフィーを認め走り寄る。
ジェシー「（疲れた顔だが、大きな笑顔で）ソフィー！」
ソフィー「（明るい笑顔で）ジェシー！」
笑顔でそれを見つめるトム。
抱き合いながら飛び跳ねるソフィーとジェシー。
（ＳＴＯＰ　ＭＯＴＩＯＮ）

１４８　鳥飼俊の告白（シーン１４７に投影）

私は絵里子と関係を持つと同時に、ジェシーが未成年であることを知りながらジェシーとも肉体関係を結んでいました。そして、それを材料に赤沢から恐喝されていました。
赤沢を殺したのは、それが理由です。
赤沢は美人局をやって、他人を恐喝し、生計を立てるような卑劣な男です。そんな奴を殺すのに、躊躇はありませんでした。
しかし、私の犯行を知ったジェシーが騒ぎ始めたのには困りました。私の犯行がバレないためには、彼女を殺すか、監禁する他に方法がなかったのです。ただ、私はジェシーを愛していたので、殺すというオプションはありませんでした。
ジェシーの行方を探すために、私立探偵を雇

うように絵里子に勧めたのは私でした。これは、私が怪しまれないようにそうしたのですが、それが大きなミスでした。
西野屋は思ったより有能な私立探偵で、赤沢殺しも、ジェシーを監禁しているのも私であることに薄々気づき始めていた。
西野屋を殺したのはそれが理由です。そしてついでに邪魔なソフィーも殺そうと思った。
あの時、それに成功していれば、私は逮捕されることもなかったでしょう。
後は皆さんが知る通りです。私を追い詰めたのが、ひとりの女子高生だったというオチです。笑い話にもなりません。

149　エンドタイトル

完